
IS <インフィニット・ストラトス> 百鬼を背負いし者

紅神

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

IS<インフィニット・ストラトス> 百鬼を背負いし者

【Nコード】

N0495R

【作者名】

紅神

【あらすじ】

ここは、本来の道筋を辿らなかつたISの世界。

これは、その中に存在する一人の男と男のことを想う少女たちの物語。

注意：この小説では一夏は女です。

一夏は男だ！ヒロインじゃない！原作を壊したくない！汚したくない！という方は読むのをやめるのをオススメします。

ブローグ／ヒギンズナイト

3年前のあの日。

僕が俺になったビギンズ・ナイト……

あの日は、両親と隣に住んでいた幼馴染の“姉妹”、

そしてもう一人の幼馴染と一緒に出かけていた。

姉妹の妹と幼馴染が僕を挟んで喧嘩をして僕が不思議そうにしているのを両親と姉妹の姉が呆れて見ている。

そんないつの光景だった。

だが、終わりは突然訪れた。

両親と別れて、姉妹と幼馴染と一緒にアイスを買っていた時、それは起こった。

正体不明のISによるテロ。

爆発の衝撃は凄まじく、僕たちの居た所にまで激しい衝撃が来た。

爆発の起きたほうを見て、僕は言葉を失った。

爆発が起きたのは、両親がいた所だった。

両親がいたはずの所は瓦礫の山とかしていた。

呆然としている僕を必死に抱きしめる二人の幼馴染。

どこかに、急いで電話をかけている姉妹の姉。

しかし、現実はず変わらず、残ったのは両親の“死”だけだった……

両親の葬儀が終わり、父の書斎を片付けていた時、それは見つかった。

“遺書”

そう書かれた一枚のディスクと腕輪だった。

急いで、パソコンにそのディスクを入れて中身を確認した。

記録されていたのは一つの映像だった。

『お前がこれを見ているということは、私たちはもうこの世にはいないのだろう。』

お前に、つらい思いをさせてしまったすまないと思っている。だが、今から言うことをよく聞くん。

おそらく私たちを殺したのは亡国企業と呼ばれる組織だろう。奴らは、私を作り上げたISを狙っていた。私たちが渡さなかったから、同じものを作らせないために私たちを始末したのだろう……

あれは、お前にしか使うことができないようにしている。

お前に過酷な運命を背負わせてしまって申し訳ないと思う。

だが、これだけは言っておきたい、私も若菜も鯉半お前のことを愛している。』

映像はそこで終わっていた。

映像の最後の言葉を聞いて、涙がこぼれた。

両親が死んでから初めて泣いた。

そして、ひとつの思いが胸の中に生まれた。

歪みを破壊する。

もう、『神裂鯉半』の様な人を生みださないように。

「……っん、朝か」

懐かしい夢を見ていた気がする。

もう、遠い昔のようにも思えるし、昨日のことの様に思えるそんな過去。

「うっん」

感傷に浸っていると、布団の中から声が聞こえた。

こんな朝から……いや、人の布団の中で一緒になって寝る人は一人

しかない。

「……束さん、人が寝ている間に布団の中に入ってくるのはやめてくださいっていつも言ってますよね？」

篠ノ之束、ISの生みの親である鬼才。

世界中の国々が血眼になって捜している人物である。

そんな彼女は今、俺の布団の中で俺に抱きついて気持ちよさそうに寝ている。

「んっ……ふぁ、おはようリックくん。気持ちよかったよ／＼／」

「何言ってるんですか……」

「もう、そんなことを束さんに言わせちゃうの……リックくんのエッセイ／＼／」

顔を赤くさせながら体をくねくねさせて悶え始める束さん。

「で、その心は？」

「昨日、リックくんのISの調整が終わって渡しに来て、気持ちよさそうに寝ているリックくんを見てたら襲いっ……一緒に寝てくなくなっちゃったから」

「おい今、襲うって言わなかったか」

「やだなぁリックくん。私がそんなこと言わけないじゃん」

ほお……どつやら、上下関係を再認識させた方がいいな。

そう考えた俺は、“束”の手を掴んで布団の上に抑えつけた。

「えっと、リックくん？目が怖いんですけど」

「何、しつげの悪いウサギにはお仕置きが必要だと思ってな」

女を魅了させる笑みを浮かべながら束に迫っていった。

「／／／や、優しくしてね？」

「ああ、任せろ。優しくしてやるよ」

そして、束の唇に自分の唇を落とそうとした瞬間、部屋の襖が開いた。

「鯉半さま、朝です……何やってるんですか！！」

襖を開けて入ってきた女性、雪原氷麗ゆきはらひるいは俺たちの状況を見て叫びをあげた。

「……はあ、束さん着替えるんで部屋に戻ってください」

「まあ、いいところだったのに……リックくんまた今度続きしようね。」

あと、“百鬼夜行”は机の上にあるからね

愛してるよと叫びながら束さんは部屋から出て行った。

俺は立ち上がり、机の上にある待機状態の百鬼夜行を手を取った。

ちなみに、百鬼夜行の待機状態は、腕輪である。

「……やっと、お前と飛べるんだな」

腕に百鬼夜行を着けながら言葉をかけた。

だが、俺はこのとき忘れていた。

この部屋に俺以外にもう一人存在していることを……

「り〜は〜ん〜さ〜ま〜、さっきのはどういふことですか!?!」

この部屋にいた女性、つららが己のIS“吹雪”の腕を纏って詰め寄ってきた。

「なんだ氷麗、嫉妬か?」

「な、な、な……鯉半さまのバカー!?!」

氷麗はそう叫びながら殴りかかってきた。

俺はそれを難なくよけて、後ろから抱きしめた。

「こうしてほしかったんだろう?」

俺がつららの耳元でささやくと氷麗は、全身を赤くして

「~~~~!!失礼します!!」

そう言っつて、俺の腕の中から逃げるように抜けて部屋の外へと行ってしまった。

廊下からは氷麗ひいりが走り去る音と共に「きゃ〜!きゃ〜!鯉半さまに抱きしめられた〜!!」という声が聞こえてきた。

俺はその音を聞きながら笑みを浮かべていた。

3年前のあの時まででは考えなかった自分の変わり様。

そんなことを考えながら今日から始まる新たな生活に思いを巡らせた。

少年は想いを背負い成長した。

しかし、心に負った傷は未だ癒えてはいなかった。

新たな出会いをもたらす場所で、懐かしき再会を果たす時、少年は何を思っのか……

プロローグ／ヒギンズナイト（後書き）

はじめましての方ははじめまして。

久しぶりの方は、とてもごめんなさい。

1年ぶりの投稿です。

他の作品はどうした？

本当にごめんなさいm(| |)m

書いてはいるんですが、全然進まず……

今月中にはがんばって書き上げます。

ではまた次回ノシ

主人公設定

主人公

名前 かんざき りはん
神裂鯉半

身長 178?

体重 66?

性別 男

容姿 ぬらりひよんの孫に出てくる奴良鯉半の髪の毛の色が銀と黒のツートーンになったような感じ。

性格 小学生のころまでは、活発でクラスの中心といった感じの性格であったが、両親をテロで亡くしてからは正反対とも言える大胆で強気な性格となったしまった。

しかし、根本的な部分は変わってはいなく、その行動は、常に切実な人たちのために動いている。

専用IS

百鬼夜行『信じ合う者の想いと力を背負うIS』

篠ノ之束の恩師である鯉半の両親である神裂輝火と神裂若菜が基礎構造を考えたコアを使用したのIS。

束が基礎フレームを開発した。

世代 第四世代

搭載武装

祢々切丸

刀型近接戦闘用武器で百鬼夜行の主力武器。

百鬼夜行にはこれ一つしか武器は搭載されていない。

業わざ

“ 明鏡止水 桜 ”

祢々切丸に炎をまとわせて相手を切り裂く奥義。

相手を切った後、その炎は、桜へと変化することができる

ワンオフ・アビリティー

鬼纏まとい

百鬼夜行のワンオフ・アビリティー。

鯉半と心を合わせることで無限の可能性を発揮することができる。

鈴との鬼纏 『 鬼纏 装甲龍の双牙しゅうが』

鈴と鬼纏をすることで発現する。

百鬼夜行に甲龍の両刃青竜刀と衝撃砲が装備される。

衝撃砲を使った瞬時加速を使うことができる。

CV 福山 潤

以後順次更新

再会の0/世界で唯一の

ここは、IS学園。

篠ノ之束が開発した女性のみが使用することのできるIS正式名称『インフィニット・ストラトス』の使用方法を教え、教育する機関だ。

私、織斑一夏は今日からIS学園の生徒となった。

3年前、鯉半が私たちの前から消えてから心の中に穴がぽっかりと空いたようだった。

そんな日々が続いた中、半年前、しばらく連絡のなかった千冬姉から一本の電話が入った。

『鯉半に会いたかったらIS学園に來い』

あのテロがあつてからISを避けていた私だったが、その言葉を聞いて一気に変わった。

私は、必死に勉強をした。

そして、日本代表候補生にまでなった。

鯉半との再会のためだけに……

「（でも……なんで鯉半はいないんだ!!）」

現在、入学式を終えた私は自分の教室1年1組にいる。

入学式の会場に鯉半はいなかった。

「（鯉半に会うの楽しみにしてたのに……せつかく色々と気合入れて来たのに……）」

「……さん、織斑一夏さん！」

私が一人の世界に入っている中、呼ばれていることに気が付いた。

「あ、はい！なんですか？」

「あっ、あの、大声出しちゃってごめんなさい。あのね、自己紹介

『あ』から始まって今『お』なんだ

よね。自己紹介してくれるかな？ダメかな？」

このクラスの副担任である山田真耶先生が手を合わせてお願いしているのが見えた。

「すみません、少し考え事をしていて……」

私はとりあえずあやまった。

「織斑一夏です。一応、日本代表候補生です。よろしく願いします」

何だろう、回りからあつい視線を感じる。

なんかこう、昔千冬姉が受けていたような感じの視線だ。

なんか、小さく『お姉さま』とか聞こえてくるし……

わ、私にはそんな趣味はないよ？

すると、教室の前のドアが開き、千冬姉が入ってきた。

なんで？ここで教師をしてるのは知ってたけど……

「あつ、織斑先生！もう会議は終わられたんですか？」

「ああ、山田君。クラスへのあいさつを押しつけてすまなかった」

「い、いえっ。副担任ですから、これ位しないと……」

なんか、いやな予感がする……

だって、あの年下好きでいつも鯉半のことを狙っていた千冬姉が……

パンツッ！！

私がそう考えている時、私の心を読んでいたかのようなタイミングで出席簿で殴られた。

かなり痛い。

「諸君、私が織斑千冬だ。君たち新人を一年で使い物になる操縦者に育てるのが私の仕事だ」

千冬姉は痛がる私を無視して淡々と自己紹介をしていた。

「私の言うことをよく聞き、よく理解しろ。出来ない者には出来るまで指導してやる。私の仕事は弱冠一五才を一六才までに鍛え抜くことだ。逆らってもいいが、私の言うことは聞け。いいな」

暴君だ……ここに、独裁国家がある。

「キヤーーーー！千冬様、本物の千冬様よ！」

「ずっと、ファンでした！」

「私、お姉様に憧れてこの学園に来たんです！北九州から！」

「あの千冬様にご指導いただけるなんて嬉しいです！」

「私、お姉様の為なら死ねます！！！」

何なんだこの人気は……

みんな、きつと真実を知らないからこんなに騒いでいる……

パンツッ！！！

今度はとてつもなく強い力で殴られた。

「千冬姉！痛いっ……」

パンツッ！

本日三回目。

「織斑先生と呼べ」

「……はい、織斑先生」

このやり取りがまずかったのか、私と千冬姉が姉妹だったことがクラスにバレってしまった。

「え、織斑さんって、あの千冬様の妹？」

「そつえば、どことなく似てるよね？」

「姉妹そろって日本代表だなんて、素敵！！」

最後の人、私は代表候補生だ！！

「……毎年、よくもこれだけ馬鹿者が集まるものだ。感心させられる。それとも何か？私のクラスにだけ馬鹿者を集中させているのか？」

やれやれといった感じで首を振りながら千冬姉が呟いた。

私は、未だジンジンと痛む頭を押さえながら6年ぶりに再会した篠ノ之箒の方を見た。

先程まで窓の外を見ていた箒が私の方を見ていた。

その視線からは、何か話したいといったようなものを感じた。

「（そう言えば、まだ箒と話してなかったな……）」

「それではSHRを終わりにする……と言いたいところなのだが、1人自己紹介を終えてない奴がいてな……。おい、入れ」

いつの間にかに全員の自己紹介が終わり、千冬姉がSHRを終わらせるかと思ったら、まだ紹介していない人がいると言って廊下の方へと声をかけた。

教室の前のドアが開き、入ってきた人物を見て私は、これでもかという位、目を見開いた。

だって、そこからずっと会いたかった人“鯉半”が入ってきたのだから……

— 夏 side out

俺は、IS学園のゲート前にいる。

今朝の騒動のおかげで見事に入学式に遅れてしまった。

今朝の騒動とは、あの後（プロローグ参照）正気に戻った氷麗ヒマリと束さんによる第143回神裂家大戦である。

“神裂家大戦とは氷麗ヒマリと束によるISを使ったドックファイトである。大体は

鯉半絡みのことでおきる”

事態の收拾をしていたらいつの間にか遅刻していた。

「久しぶりだな、鯉半」

と、俺に声をかけて来たのは織斑千冬。

幼馴染である一夏の姉であり、昔からよく面倒を見てくれた人だ。

「お久しぶりです、千冬さん」

「待たせてすまなかったな」

「いえ、元々遅れた俺が悪いんですから……」

「それもそうだな」

そして、お互いに目を合わせた。

「……クツ、ハハハ!!!」

どちらともなく堪えきれなくなり二人して笑い始めた。

「本当に久しぶりだな。お前が3年前、神裂の本家に引き取られて以来か」

「そうですね。もう、そんなに経つんですか」

昔のことを思い出しながら二人して懐かしむ様に話していた。

「それでは行くのでしょうか」

「そうですね」

俺は、千冬さんの後について行った。

「ここで待ってる。私が呼んだら入ってこい」

そう言って、千冬さんは教室の中に入って行った。

さて、3年ぶりと6年ぶりの再会だ。

一夏に筈、元気にしていたのだろうか？……

『それではSHRを終わりにする……と言いたいところなのだが、1人自己紹介を終えてない奴がいてな……。おい、入れ』

それじゃあ、感動的な再会といきますか。

ドアを開け、教室の中に入るとそこには、女しかいなかった。

まあ、わかってはいたが、居心地はあまり良くはないな……

「では神裂、自己紹介を頼む」

「はい。神裂鯉半だ、一応世界で唯一の男のIS操縦者と言われている。よろしく頼む」

『……………』

自己紹介に対して返ってきたのは数秒の沈黙。

『ぎゃあ—————!!』

そして、爆発的な歓声が上がった。

そんな中、二人ほど目を見開いて口をパクパクさせているのもいたが。

無論、ファースト幼馴染ズの二人であるが……

「もしかして、あのニュースで言ってた!！」

「ものすごい、イケ面じゃない!！」

「ああ、このクラスでよかった……」

などといった声があちこちから聞こえた。

「静かにしろ!これでSHRを終わりにする。神裂への質問は休み時間にしろ」

千冬さんの一声で教室は静まり返った。

一時間目のIS基礎理論授業が終わって休み時間。

俺の周り……というか、教室は異様な雰囲気にもまれていた。

束さんが、世界に対して行った発表のおかげで、学園関係者から在校生まで俺の存在を知っている。

そのため、廊下には他のクラスの女子、2、3年の先輩たちまでが詰めかけている。

その中には、見知った顔の人もいたのだが……

そんな中、俺に二人の女子が近づいてきた。

「一夏、篝」

「ちょっといいか？」

「……………」

3年ぶりと6年ぶりに再会した幼馴染たちだった。

「廊下でいいか？」

「ああ」

そして、二人を連れて廊下に出て、人の居ないところに行った。

久しぶりに再会した二人は、以前にも増して女らしく成長していた。

一夏は、千冬さんを思わせるように成長をしていた。

篝は、昔のように髪を結っており、全体的に女らしさが増していた（特に胸が）。

「久しぶりだな二人とも」

「あ、ああ……………」

「う、うむ……………」

笑いかけながら言ったら、二人とも顔をほんのり赤くしながら返事

をした。

「それと箒、昨年の剣道の全国大会優勝、おめでとう」

「な、なんで知っているんだ!!」

さらに顔を赤くして、箒が詰め寄ってきた。

一夏はその光景を見て不機嫌そうに顔を歪めていた。

「まあ、新聞とかでな」

「な、なんで新聞なんか読んでいるんだ!」

「なんでって、俺が新聞を読んだらだめなのか?」

「そ、そんなことはないが……」

俺の言葉に、縮こまってしまった箒。

仕方なく、俺は次の行動に出た。

「最初は、箒だとは気付かなかったぞ」

「そ、そうか……」

俺の言葉で箒は顔を俯かせてさらに縮こまってしまった。

そんな箒の髪の毛を梳きながら

「こんなにきれいになつてるとは思わなかつたぞ？」
と言った。

「な、な、な……」

箒は、顔を赤くして口をパクパクさせていた。面白いなこれ……

しかし、俺のこの行動に黙っていない人物が一人。

「おい、鯉半！何やってるんだ！！」

そう、放置されていた一夏である。

「何だ一夏、お前もやってほしいのか？」

そう言いながら一夏のセミロングの髪の毛を箒のように梳いてやった。

「な、な、な」

二人して同じリアクションか……

おもしろいな。

そんな二人を笑いを堪えて見ていると、チャイムが鳴った。

二人はいまだ顔を赤くして口をパクパクさせており、チャイムの音に気が付いていなかった。

千冬さんに怒られるのも嫌なので二人を放置して俺は教室に戻った。

そんな二人がどうなったかは、言わなくてもわかるだろう……（合掌）

再会の〇ノ世界で唯一の（後書き）

やっとこさの更新です。

誤字などがあれば報告お願いします。

あと、鯉半と のこんなシチュエーションが見てみたい！！
などがあれば、どしどしお願いします。

キャラ設定

織斑 一夏

身長 167?

体重 死にたいのか？

性別 女

性格 原作の一夏と千冬を掛け合わせて若干千冬が多い感じ。
早い話、姉御肌だがどこかヘタレ。
最近、鯉半の周りに女が多いことに気づき積極的にアプローチを
かけようと考え始めている。

専用IS 白式

この世界では、篠ノ之束が、一夏を鯉半と一緒に戦わせるために調
整したISという設定。

あとは、原作と同じ。現在は一次移行は終了している。

雪原氷麗フユノヒナキ

身長 150?

体重 凍らされたいのですか？

性別 女

見た目 ぬらりひよんの孫の雪女の人間状態である及川氷麗そのまんま。

専用IS 吹雪

所属 神裂本家 鯉半付きの世話係兼護衛

性格 鯉半と同じ年で、心配りができて前向きで明るい性格。

鯉半には、主として以上の気持ちを持っており、鯉半に近づく女に対しては容赦がない。

束とは仲は悪くないが、鯉半が絡むといろいろと大変なことになる。現在、IS学園への転入のために動いている。

淡島あわしまあまの亜麻乃

身長 159?

体重 48?

性別 女

見た目 ぬらりひよんの孫のあまのじゃく淡島の女バージョン

専用IS あまのじゃく天邪鬼

所属 神裂本家 若頭補佐兼護衛

性格 鯉半と同じ年で、鯉半の補佐兼護衛。

口が達者でケンカつ早い、ひねくれ者……というかツンデレ。
現在は、本家の用事で東北地方にいる。
おそらく、IS学園に来る……と思う。

山吹乙女やまぶきおとめ

身長 162?

体重 殺されたいのか?

性別 女

見た目 ぬらりひよんの孫の現代の羽衣狐

専用IS 羽衣狐

所属 京都山吹家 次期当主

性格 鯉半と同じ年で、身内とみなした者には優しく、他人にはどこまでも冷たい。

京都の名家、山吹家の次期当主でそのため、IS学園には通っていない。

が、その内転入しそう……

鯉半の許嫁……らしい。

鯉半の前では超デレる。それはもう人が変わるくらい……

篠ノ之 束

性別 女

専用IS 夜雀

所属 神裂本家居候

詳細 現在、逃亡中の身のため神裂家に匿ってもらいながらISの
開発をしている。

鯉半にベタ惚れで、事あるごとに鯉半に迫っている。

実は、鯉半の初めての……

以後随時更新

会合のC / 戦いの狼煙

現在、2時間目の授業が終わったの休み時間。

相変わらず、教室は異様な雰囲気にもまれていた。

そして、幼馴染二人からは殺気を込められた視線を向けている。

どうやら、先程のことを今だ恨んでいるようだ。

「ちょっと、よろしくて」

「ああ？」

そうやって話しかけて来たのは、明らかに日本人ではない、白人の女子だった。金髪の地毛で、白人特有のブルーの瞳でやや吊りあがった感じの目が俺を見ていた。

少しロールがかかった髪はいかにも高貴なオーラを出しており、その女子の雰囲気は『いかにも』今の女子といった感じだった。

俺の嫌いな分類の人間だ。

「訊いてます？お返事は？」

「……………」

俺は、女に一瞬視線を向けてすぐに視線を戻した。

「ちょっと！訊いてますの！」

「……訊いてる。何の用だ？」

「まあ！なんですよ、そのお返事に態度は。私に声をかけられるだけでも光栄なので、それ相応の態度という物があるのではないかしら？」

ISが世に出てからはどこに行っても女はこんな感じだ。

女尊男卑。今の世の中の仕組みだ。

まあ、俺には関係ないが……

「んなこと言われてもな……てか、あんた、誰だ？」

「わたくしを知らない？ このセシリア・オルコットを？ イギリスの代表候補生にして、入試主席のこの私を！」

この女、セシリアは白い肌を赤くしながら怒っている。

「で、代表候補生さまが俺に何の用だ？」

「ふん。わたくしはエリートですから、あなたの様な人間にも優しくしてあげますわよ」

そんな、上から目線の優しさなんかいらぬ。

「ISの事でわからない事があれば、まあ……泣いて頼まれたら教えて差し上げてよ。何せわたくし、入試で唯一教官を

倒したエリート中のエリートですから「

よく喋る女だ……

んっ?“唯一”だと?

「入試で唯一教官を倒しただと?」

「そうですね!」

「く、ククク」

おもしろすぎるぞこの女……

「何がおかしいんですの!?!」

「いや、俺も倒したぞ?教官を」

「は……?」

俺の言葉が信じられないのか、セシリアは眼を見開いている。

「わ、わたくしだけと聞きましたが?」

「ククク、女子ではってことだろ」

確かに唯一だな“女”では。

だんだんとセシリアの顔が引き攣ってきた。

「な、な、な、また笑いましたわね!!」

「面白いんだ。笑わなきゃ損だろ？」

皮肉を込めてまた笑ってやると、今度は顔を赤くさせ始めた。

「あ、あなたって人は！」

セシリアが叫びかけた時、幸運にも3時間目の開始のチャイムが鳴った。

「っ……！またあとで来ますわ！逃げないことね！よくって!？」

俺は、はいはいと手を振りながら生返事をした。

その態度にまた怒ったのか、俺を睨んでからセシリアは席へと戻った。

「それではこの時間は実践で使用する各種装備の特性について説明する」

3時間目の講師は、1、2時間目の山田先生と違って、千冬さんのようだ。

「ああ、その前に再来週行われるクラス対抗戦に出る代表者を決めないといけないな」

千冬さんは思い出したように言った。

クラス代表者ねえ……

「クラス代表者とはそのままの意味だ。対抗戦だけではなく、生徒会の開く会議や委員会への出席……まあ、クラス長だな。ちなみにクラス対抗戦は、入学時点での各クラスの実力推移を測るものだ。今の時点でたいした差はないが、競争は向上心を生む。一度決まると一年間変更はないからそのつもりで」

クラス中がざわめきだした。

まあ、俺には関係ないな。

「はいつ。神裂くんを推薦します!」

……は？

「私もそれがいいと思います!」

その声を皮切りに、クラス中から俺を推薦する声が出て来た。

どうやら世界は、俺に優しくないようだ。

「どうして俺がやらなきゃいけない?」

「他にはいないのか? いないなら無投票当選だぞ」

無視された……これはあれか? 今日、会ってから会話をしていたなかったからか?

「待ってください! 納得がいきませんわ!」

机を叩いて立ち上がったのはセシリアだった。

またお前かよ……

「そのような選出は認められません！大体、男がクラス代表だなんていい恥さらしですわ！わたくしに、このセシリア・オルコットにそのような屈辱を一年間味わえとおっしゃるのですか！」

本当によく喋る女だ……

「実力から行けば私がクラス代表になるのは当然、それを物珍しいからと言う理由で極東の猿にされては困ります！私はこのような島国までES技術の修練に来たのであってサーカスをする気は毛頭ございませんわ！」

ほう、よく言ったぞ女……

「いいですか！？ クラス代表とは実力トップがなるべき、そしてそれは私ですわ！」

そろそろ、俺も堪忍袋の緒が切れそうだ。

「大体、文化としても後進的な国で暮らさなくてはいけないこと自体、私にとっては苦痛で……」

ブチンッ

俺の頭の中で何か切れた音がしたと同時に俺は神裂家一子相伝のヤクザキックで机を蹴り飛ばした。

周りが驚いている中、一夏と千冬さんはやっちゃったという顔をしていた。

ちなみに箒は驚いていた。

「おい、金髪縦ロール」

「た、縦……！」

「てめえこそなんだ。さつきから聞いてりや偉そうなことグダグダ言いやがって。」

てめえの国なんてクソまずい飯しか取り柄がねえだろ」

俺の言葉に、セシリアは、顔を真っ赤にして

「あつ、あつ、あなたねえ！ わたくしの祖国を侮辱しますの！？」

「てめえだつて人の国、侮辱してんじゃねえか」

俺は睨みを利かせて言ってやったが、頭に血がのぼっているセシリアには

「決闘ですわ！」

効いてない様だった。

「いいぜ、相手になってやるよ」

「言っておきますが、わざと負けたりしたらわたくしの小間使い……いえ、奴隷にしますわよ」

「言ってる。勝つのは俺だ。」

「そう？ 何にせよ丁度良い機会ですわ。イギリス代表候補生、このわたくし、セシリア・オルコットの實力を示すまたとない機会ですわね！」

そう言っつてセシリアは、何かを思いついたような顔をして

「ハンデはどれ位がよろしくて？」

と言っつてきた。

「あん、そんなもんいらねえよ」

俺のその言葉に、クラス中から爆笑が起きた。

「か、神裂くん、それ本気で言っつてるの？」

「男が女より強つたのなんて大昔の話だよ？」

「そつだよ、今からでも遅くないからセシリアにハンデつけて貰つたら？」

「代表候補生を舐めすぎだよ」

笑いが治まらない中、クラス中からそんな声が聞こえてきた。

「黙れ……」

俺の一言で、一瞬にして、クラスのざわめきが治まった。

「てめえら全員に言っておく。男だからと言って俺をあんまり舐めるな。セシリア・オルコット。てめえもだ。あんまり調子に乗っていると足元すくわれるぞ？」

おそらく、周りから見れば不敵な笑みを浮かべているだろう俺は、まっすぐにセシリアの目を射抜きながらそう宣言した。

そんな俺の顔を見て、周りは顔を赤くしてしまっていた。

そして、一夏、筈、千冬さんからは、『何やってるんだ。この野郎』といったような視線が飛んできていた。

放課後。俺は、教室に残っていた。

あの後、千冬さんにより決闘の日時が1週間後に決まった。

「まったく、面倒なことになったな……」

ここ最近、あんまり修行してなかったからな……

鬼發^{ひはつ}や鬼憑^{ひよつ}ちゃん^{ちゃん}と使えつかないかな……

「ああ、神裂くん。まだ教室にいたんですね。よかったです」

気が付くと、目の前には、山田先生が書類を片手に立っていた。

「どうやら、考えに浸りすぎて気配を読めていなかったようだ……」

「どうしたんですか？」

「えっとですね、寮の部屋が決まりました」

そう言っつて部屋番号の書かれた紙とキーを渡してきた。

「あれ、俺の部屋決まっつてなかったんじゃないんですか？」

「そうなんですけど、事情が事情なので一時的な処置として部屋割を無理矢理変更したらしいです」

「そうなんですか……あれ、でも荷物は？」

「そう、俺の荷物はまだ神裂の本家にある。」

「荷物なら私がお前の家に頼んですでに手配してある」

そのセリフと共に現れたのは、千冬さんだった。

「マジですか……？」

「ああ、電話をしたらさっさと届けてくれたぞ？ “アイツ”が」

やってくれたな東さん……

千冬さんが“アイツ”なんていう人は本家にはあの人しかいない。

「わかりましたよ……」

そう言つて、紙と鍵を受け取つて行こうとしたが山田先生に呼び止められた。

「あつ、神裂くん。お風呂なんだけど、神裂くんはまだ大浴場は使えませんか」

「なんで……そういうことですか。わかりました」

俺だって、好きで女と一緒に風呂に入ろうとは思わない。

そう、好きで入っていたわけじゃない！！

あれは、事故と陰謀だ！

はっ！今、一瞬、昔のトラウマが……

俺は頭を振つて意識を切り替えてとつと廊下に出た。

廊下からは、『婦女子談義』とやらがあちこちから聞こえてくる。

それらを気にせず、とつとと寮へと向かった。

「1025号室……ここか」

番号を確認して見つけた部屋のドアに鍵を差し込んだ。

だが、鍵はすでに開いていた。

不思議に思いつつも、部屋の中に入って行った。

部屋の中には誰も居らず、俺の荷物があった。

荷物を調べるため、荷物の所まで行き荷物を確認した。

確かに俺の荷物のようだ。

とりあえず、『畏』の代紋が入った羽織を出して羽織った。

やはり、これを着ると落ち着くな。

「誰か居るのか？」

すると、奥の方から声が聞こえてきた。

……いやな予感がする。

「ああ、同室になった者が。これから一年よろしく頼むぞ」

そして、この口調……どこかで聞いたことがあるな。

「こんな恰好ですまないな。シャワーを使っていた。私は篠ノ之……」

「……箒」

シャワー室から出て来たのは、バスタオル姿の箒だった。

シャワーを浴びた後だからだろうか、その姿はとても美しかった。

これは、束さんにも引けを取らないな。

「り、り、りはん……?」

「おっ……」

箒は、一気に赤くなった。

そして、恥ずかしくなったのか、自分の体を隠すように抱きしめた。

が、余計にその成長した胸を強調していた。

ヤバい、スイッチが入る……! !

“説明しよう、神裂鯉半は度重なる本家での束や氷麗などのアプローチにより、一種の自製のスイッチができたのだった。しかし、今の状況のようになるとスイッチがOFFになってしまふのだった!”

「っ……！み、見るな！」

「わ、悪い！」

俺は、顔をそらして何とか理性でスイッチを切り替えないようにした。

ついでに、羽織っていた羽織も渡した。

「な、な、なぜ、お前がここにいる」

箒は、渡されて羽織を着ながら俺に聞いてきた。

「俺も、この部屋なんだが……」

と言った瞬間からの箒の行動は早かった。

壁に立てかけてあった木刀を取ると、くると回って俺に向かって振り下ろしてきた。

「っお……！」

何とかそれを避けて、荷物の方へと飛びのき、壁に立てかけてあった木刀“多樹丸”を取って、後ろで木刀を振り下ろしてきていた箒の攻撃を防いだ。

「おいおい、冗談でもやめろよ」

「っ！どうやら、ちゃんと鍛錬はしていたみたいだな」

嬉しそうに言ってくる箒だが、恰好が恰好のため締まらない。

「とりあえず、木刀を納めてくれ」

「……わかった」

そして、お互い木刀を納めた。

「廊下で待つてるから服着ろ」

「／＼早く出ていけ！」

顔を赤くしている箒を無視して、さっさと廊下に出た。

しかし、廊下に出たのは良かったが

「……なにになに？」

「あつ、神裂くんだ」

「えー、あそこって神裂くんの部屋なんだ！いい情報ゲット」

騒ぎを聞きつけた女子たちが、わらわらと部屋の中から出て来た。

そして、寮だからか全員が無防備すぎる恰好だった。

箒、早くしてくれ……

二、三分くらいして部屋のドアが開いた。

「…………入れ」

箒は、剣道着に着替えており、その上にもう必要ないはずの俺の羽織も羽織っていた。

「ああ…………」

箒の後を追うように、俺も部屋へと入って行った。

急いで着替えたからだろうか、道着の帯の締め方が甘いのが気になってしまったので、

「箒、ちょっと来い」

「…………？何だ鯉半」

そう言っただけで近いてきた箒を抱きしめるようにして帯を直し始めた。

「り、り、りはん…！」

「黙ってる」

「／／／そ…いき…………「じじ…………が」

なんか呟いている箒を無視して帯を締め直した。

「よし、出来たぞ」

「へ？」

いきなり体を離された篤は変な声を出して驚いていた。

「何驚いてるんだ？」

「……なんでもない」

篤の様子から、何を期待していたのかが一発で分かる位の落胆の仕方だった。

「……神裂くんって大胆なのね」

「抜け駆けしちゃダメだよ！」

「神裂くんが攻め……いいわ！あの鋭い目で睨まれながら罵られたい……！」

ドアの方を見ると、五人ほどがドアから首を出しながらこちらを見ていた。

見えている女子以外にも、廊下には倍以上の女子たちが居るのだろう。

「……………！」

篤は、無言で女子たちを追い出してドアのカギを締めた。

「お前が、私の同居人だと言うのか？」

そして、何事もなかったかのように話し始めた。

「ああ、そうみたいだな」

「ど、どういっつもりだ！男女七歳にして同衾せず！常識だ！」

そう言っつてすごい剣幕で捲くし立てる筈。

そう言われてもな……

本家なんて、女所帯だったからあんまり気にならないんだよな。

「お、お前から希望したのか……？私の部屋にしろと？」

もじもじしながら聞いてくる筈。

「いや、偶々だろ」

「そ、そうか……」

そして、先ほぼと同じように落胆してしまった。

しばらくして復活した筈と今後について話し始めた。

「り、鯉半、この部屋の決まりというか……その、なんだ。く、暮らす上で線引きは必要だろうという話でな……」

後半からごによごによと潰れて、何を言ってるか分からなかったが、とりあえず、決まりを決めるということは分かった。

「ま、まずシャワー室の使用時間だ。私は七時から八時。鯉半は八

時から九時だ」

「ああ、わかった」

とまあ、こんな具合に決めていった。

夕食（一夏とひと悶着あつたが）も済ませ部屋でくつろいでいる時、ふと大事なことに気が付いた。

「なあ、箒」

「何だ鯉半？」

剣道着から寝る格好に着替え、その上に俺の羽織を着ている箒は、俺の方を向いた。

「その羽織、返してくれねえか？」

「あ、ああ……そうだったな」

一瞬驚いたような表情を見せてから、名残惜しそうに羽織を脱いだ。

「……欲しいのか？」

「っ！い、いや……そういうわけじゃ……」

そわそわしだした箒を余所に、俺は荷物の中になぜかあった他の畏の代紋の入った羽織を箒に渡した。

「え、鯉半？」

「欲しかったんだろ？それは俺のだが、こっちならいいぞ」

「いいのか？」

「ん、ああ。元々これは、本家の奴らが作った物でな。俺が認めた奴にしか渡してない物だ」

と、羽織について説明をした。

ちなみに、この羽織は東さんや氷麗、千冬さんも持っている。

「あ、ありがとう／＼／」

そう言って、箒は嬉しそうに羽織を抱きしめた。

「そうか、そうか、鯉半は私を認めているのか……」

なんか、小さい声で言っているようだったが、小さすぎて、聞き取れなかった。

そして、この羽織がまた、ひとつの騒動の引き金となって行くのだが、それはまた別の話。

おまけ

深夜、すでに筭は夢の中に旅立っている時間、俺は携帯をいじっていた。

「……………乙女と亜麻あまの乃からメールが来てた」

携帯には二通のメールがあった。

“鯉半よ、妾に何も言わず行くとはどういふことだ！この埋め合わせは必ずしてもらおうからの！！”

“鯉半！何勝手に行ってやがんだ！！俺もその内、IS学園に行くからな！！”

どちらも、連絡をしなかったことに怒ってるようだった。

どうやら、また厄介事が増えそうだ……

会合のCノ戦いの狼煙（後書き）

何とか書き終えた。

このペースを持續していきたいな……

誤字がありましたら、お知らせください。
ではまたノシ

決闘のC / 百鬼夜行の主

翌朝、箒と一緒に一年生寮の食堂で朝食をとっていた。

俺は、すでに制服に着替えて朝食を食べているんだが、箒は、制服の上に畏の代紋入りの羽織を羽織っていた。

昨日あげたのが、よっぽど嬉しかったのか……？

するとそこへ

「おはよう、鯉半に箒」

朝食を持った一夏が来た。

「鯉半、隣いいか？」

「ん、いいぞ」

そう言っただけで一夏は左隣に座った。

ちなみに、箒は右隣に座っている。

「……箒、その羽織どうしたの？」

一夏は、朝食を食べながら横目で箒を見ながらそう言った。

箒は、得意そうな顔をして

「鯉半にプレゼントしてもらったんだ」

と嬉しそうに言った。

『なんだってえー！』

一夏といつの間にか聞き耳をたてていた女子たちが一斉に声を上げた。

「それ本当！篠ノ之さん！」

「抜け駆け禁止って言ったじゃん！」

「いいなあ」

口それぞれに思ったことを言って、段々と食堂内がうるさくなってきた。

俺は、我関せずといった感じで黙々とご飯を食べていた。

別に、プレゼントというわけじゃないんだが……

「り、鯉半！それ、本当なのか！」

隣にいる一夏が迫るように顔を近づけて聞いてきた。

「ん？ああ」

俺は、鮭の切り身をつつきながらそう答えた。

うん、ちょうどいい塩加減だ。

「……イ」

「？」

「ズルイぞ！ 箸ばっかり！！」

一夏が涙目になりながら掴みかかってきた。

「部屋まで同じで、プレゼントも貰って……私も欲しい！」

いつもの一夏からは見られない姿に、驚きながら、溢さないように味噌汁を啜った。

これもおいしいな。

「いいぞ」

俺が、そう答えると、一夏は嬉しそうな顔をした。

「ホント」いつまで食べている！ 食事は迅速に効率よく取れ！ 遅刻したらグラウンド10周させるぞ！！」に……」

何かを言いかけた一夏の声をかき消すかのように、千冬さんの声が食堂中に響き渡った。

その瞬間、食堂にいる全員が慌てて朝食の続きに戻った。

ちなみに、千冬さんも畏の代紋入りの羽織を着ていた。

そして、朝食を終えていた俺や箒は、何の気兼ねもなく出て行く
とした時、

「なんで、千冬姉も箒と同じの着てんの!？」

と言う一夏の声が聞こえた。

俺と箒は、無視して食堂を出たが、隣にいる箒は終始不機嫌そう
だった。

「どうした？」

「……なんでもない」

と、ぷいっと頬を少し膨らませて顔をそらして先に行ってしまった。

「く、かわいい反応してくれるね」

俺はくつくつと笑いながら、先を歩く箒を眺めていた。

今日の授業も滞りなく進み、あつという間に放課後になった。

現在、俺は箒、一夏と共に剣道場にいる。

外にはギャラリーが満載である。

俺と篤はお互いに一本も決まらないまま休憩に入っていた。

「やはり、腕は落ちていないのだな」

「まあな、稽古は一応してたし、本家にも強い人がいたから」

思い出すのは亜麻乃や牛鬼などの本家の剣術使いたち。

「そうか……一夏はどうなんだ？」

「わっ、私？……私はISの装備上鍛えなきゃいけなかったから半年前からかな」

若干あたふたしながら答える一夏。

あんまり練習してなかったんだろうな。

「そ、それより鯉半！ISの方は大丈夫なのか？」

話題を変えようとして、一夏が聞いてきた。

「……何とかなるだろ」

「何だよその釈然としない言い方は？」

「まあいいだろ。それより篤、もう一回だ」

俺は、面具をかぶりながら篤にもう一戦しようと頼んだ。

「ああ、わかった」

そして、この日は夕方まで箒と稽古をした。

side 箒

私は剣道場の更衣室で一夏と二人で着替えをしていた。

「なあ、一夏」

「なに？箒」

「鯉半は変わってないな」

六年間離れていた好きな人。

六年ぶりに再会をして、最初は変わってしまったと思っていた。

でも、話をして口調は変わっていたが、根本的な所は変わっていないというのが分かった。

優しくかった少年は、強くかっこよくなっていた。

「そうだな……」

一夏の顔が暗くなった。

「一夏？」

「……なんでもない。それより、鯉半に何もしてないよな？」

暗くなったのも一瞬で、すぐにジト目になって私を見て来た。

「な、な、そんなことあるはずないだろ！」

逆に、抱きしめられたがな。

「ホントか……？」

「ホントだ！」

まだ疑ってくる一夏から逃れるようにさっさと着替えて部屋へと戻った。

「あ、待て！」

一夏も私の後を追うようにして着替えてついてきた。

この後、一緒に部屋に来た一夏は鯉半に羽織をもらいとてもうれしそうだった。

その際、抱きついていたりしたので、思わず木刀を手にして切りかかったが、私は悪くない。悪いのは鯉半だ！！

そして、1週間後。

この1週間、箒と一夏と一緒に剣道の稽古をしていた。

ISはどうしたかって？

しばらく体を動かしていなかったから、体を動かして感覚を取り戻していたから出来なかった。

アリーナのピット搬入口

「だいじょうぶなのか？鯉半」

「問題ねえよ」

現在、俺はピット搬入口で、最終調整に入っていた。

この場には、箒、一夏、千冬さん、山田先生がいる。

「神裂、ISを展開しろ」

「了解」

そう言つて、腕輪状態のIS“百鬼夜行”を展開した。

その姿は、刀を差し、白と黒が武骨に混ざった試作品のような姿だった。

「……おい、神裂。お前まさか……」

「……あのダメウサギ、なんで“初期化”フォーマットしてんだよ!!」

展開してみても驚いた。

この間まで、一次移行を終了していたはずの百鬼夜行が、初期設定に戻っていたのだから。

あのダメウサギ、今度帰ったらタダジャオカナイ。

ちょうどその時、本家の研究室で作業をしていたウサギが悪寒を感じた後、恍惚な表情を浮かべて悶えていたとか何とか……

「だ、大丈夫なのか鯉半？」

心配そうに聞いてくるのは筈。

隣の一夏も心配そうな眼をしていた。

「なんだ、心配してくれんのか？」

「「ち、違う!」」

二人して声を合わせて言わなくても……

「おい、神裂。そろそろ時間だぞ」

「わかりましたよ」

そう言って、ピッチゲートの前に立った。

戦闘の中で、最適化を終了させなきゃいけないな。

「「鯉半」「」

後ろにいた篤と一夏に声をかけられたので振り返ると

「「勝つてこい」「」

真剣な顔をした二人にそう言われてしまった。

まいったな……こんな顔されたら負けられなくなっちまったな。

「俺を誰だと思ってる。こんなところで負けねえよ」

俺は笑いながら答えた。その顔を見た篤、一夏、千冬さん、山田先生は顔を赤くしてしまった。

そして、俺は『敵』へと向かって飛び立った。

「あら、逃げずに来ましたのね」

セシリアがふふんと鼻を鳴らす。

そこで待っていたのは鮮やかな青色の機体『ブルー・ティアーズ』

その外見は、特注的なファン・アーマーを四枚背に従え、どこか王国騎士のような気高さを感じさせていた。

その手に持つのは、二メートルを超す長大な銃器『スターライト m k?』

俺の百鬼夜行とは正反対のイメージだった。

「最後のチャンスをおげますわ」

すでに、試合開始の鳴っているが、余裕なのかセシリアは腰に当てた手を俺の方に、人差し指を突き刺した状態で向けて来た。

「あん？」

「わたくしが一方的な勝利を得るのは、自明の理。ですから、ボロボロの惨めな姿を晒したくなければ、今ここで謝るといふのなら、許してあげないこともなくってよ」

そう言って目を笑みに細める。

百鬼夜行が警告をあげる。

その警告に従い、俺は刀に手をかけた。

「御託はいいから来いよ」

「そう？残念ですわ。それなら……」

百鬼夜行の警告音がより一層強くなり、刀を抜きとった。

「お別れですわね！」

キュインッ！

耳をつんざくような独特の音。

それと同時に走った閃光を俺は叩き切った。

「なっ！！」

「なんだ……その程度なのか」

薄く笑いながらセシリアを見た。

その顔には驚愕がにじみ出ていた。

「くっ、踊りなさい。わたくし、セシリア・オルコットとブルー・
ティアーズの奏でる円舞曲ワルツで！」

射撃、射撃射撃射撃。雨のごとく降る銃撃の間をすり抜けるようにしてセシリアに接近する。

「（ちっ、百鬼夜行が俺の反応についてこねえ！）」

が、徐々にダメージを食らい始めてしまった。

「（……手間かかりそうだな）」

激戦がはじまった。

「……二十七分。持った方ですわね。褒めて差し上げますわ」

「てめえも人のこと言えないだろ」

こちらは、機体が小破。エネルギーの残量には余裕がある。

セシリアは、特殊武装『ブルー・ティアーズ』三機、機体は小破。エネルギー残量はあっちが多い。

不利な状況に追い込まれちゃったな。

「では、^{ファイナル}閉幕と参りましょう」

「いいぜ」

そして、お互いに武器を構えた。

先に動いたのはセシリア。

『ブルー・ティアーズ』を繰り四方から撃ってきた。

それをかわしながら俺はセシリアの懐へと向かって行った。

目の前に来たビットを刀で切り裂き、セシリアの懐へと飛び込んだ。

「はああ……。すごいですねえ、神裂くん」

ビットでリアルタイムモニターを見ていた真耶つぶやいた。

「……まずいな」

「どうしてですか？織斑先生」

隣で、そうつぶやいた千冬に不思議そうに聞く真耶。

「ISが神裂の反応についてってない。このままだと、意表をつかれたら一発だ」

「へええ……。織斑先生って、神裂くんのこと詳しいんですね」

何となくそう思った真耶は千冬にそう言った。

「ま、まあ、なんだ。あれでも、一応幼馴染だからな」

「へええ……ええ！そうだったんですか!?!」

そんな二人のやり取りを気にもかけない様子で心配そうにモニターを見つめている一夏と篤。

「（鯉半……）」

二人が心の中で想いの人の無事を祈った時、試合が大きく動いた。

セシリアの懐へと入り、刀を振ろうとした瞬間、

「かかりましたわね」

セシリアの言葉と共に腰部から広がるスカート状のアーマーから突起が外れ動いた。

「おあいにく様、ブルー・ティアーズは六機あつてよ」

「しまっ!!--」

俺の声をかき消すかのように爆発と光に包まれた。

「鯉半つ……!!」

モニターを見ていた一夏と篤は思わず声をあげた。

黒煙に包まれているモニター。

「……どうやら間に合ったようだな」

真剣な面持ちでモニターを見ていた千冬が、黒煙が晴れて来た時その言葉を発した。

晴れてきていた黒煙を閃光が弾き飛ばした。

その閃光の中には、先程までと違った姿をした百鬼夜行が佇んでいた。

黒と銀で統一された二枚のファン・アーマー、闇より黒い黒で統一された手足。

そして、なによりも目を引くのが、その背に背負う代紋。

鯉半の愛用する羽織と同じ『畏』。

今ここに、百鬼夜行を背負う主が真の姿を現した。

「やっと、本気が出せそうだ」

先程まで、ただの刀であった“祢々切丸”を構えた。

「ま、まさか……一次移行！？あ、あなた、今まで初期設定だけで戦っていたって言うの！？」

驚愕するセシリアを余所に言葉を紡ぐ。

「俺の力の一端を見せてやるよ」

ゾクッ！？

「きつ、消えた！？」

セシリアからは、俺が消えた様に見えるだろう。

「ハイパーセンサーにも反応がない！？どういことなのです！？」

混乱するセシリアは辺りを見回すが、それが命取りとなる。

「桜と共に散れ」

『奥義 明鏡止水 桜』

突如、後ろに現れた俺に反応できるはずもなく、セシリアはその一

撃で沈んだ。

『試合終了。勝者 神裂鯉半』

薄れゆく意識の中、セシリアが最後に見たのは舞い散る桜の中、自分を抱えている鯉半の笑みだった。

「よくやった……と言いたところだが、これはどういう事だ？」

試合が終わり、気絶したセシリアを抱きかかえて（お姫様だった）ピットに戻ると開口一番に千冬さんに言われた。

後ろにいる一夏と箒もジト目で見ている。

「山田先生、保健室どこですか？」

無視した。

かかわれるとロクなことにならないと思ったから。

「「「り〜は〜ん〜」」」

どうやら、そう簡単に逃げられないようだ……

その後、セシリアは待機していた救護班によって回収された。

俺は、3人にOHANASHIされそうになったが、ぬらりくらりと逃げることにした。

「（負けた……）」

シャワーのノズルから出る温かいお湯が、セシリアの白く透き通った肌に当たりはじける。

あの後、目を覚ましたセシリアは、部屋へと戻りシャワーを浴びていた。

「（神裂……鯉半……）」

初めての気持ちだった。

いつだって、勝利への確信と向上への欲求を抱き続けていたセシリアにとって感じたことのない感情。

あの、自信に満ち溢れ強い意志を持った眼差し。

はじめて会った“強い男”

桜が舞う中見た彼の笑み。

「神裂、鯉半……」

彼の名前をつぶやくと、胸の中に温かな気持ちがあふれた。

どこか甘くて、どこか切ないようで嬉しい。

彼のことを知りたい。

そして、この気持ちの正体が知りたい。

そんな思いが、胸の中に来た。

浴室にはただただ水の流れる音だけが響いた。

決闘のC / 百鬼夜行の主 (後書き)

更新です。

文章が雑だorz

文章力がほしいです。

キャラ設定に更新があるので見てくださいねノシ

和解のCノ千冬の誘い（前書き）

先日の大地震で被災した皆様が大変な中、

このように小説を書き上げるのはどうかと思っ
ていたりしますが、

私の書いた小説で少しでも楽しんでもらえたら
とてもうれしいです。

和解のC / 千冬の誘い

セシリアとの戦いが終わって数日後、俺はなぜかデパートにいる。

「何をしている鯉半。早く行くぞ」

「え、あ、ああ」

千冬さんと一緒に。

どうしてこうなったのか。

それは、先日のことだった。

セシリアとの戦いの翌日の朝のSHR。

昨日は、部屋に戻ったが待ち受けていた筈、一夏、千冬さんにOH ANASHIされてしまった。

まさか、一夏が怒ったら千冬さんの様になるとは思わなかった。

一晩中、OH ANASHIされてたせいでものすごく眠たい。

「では、一年一組代表は神裂鯉半くんに決定です」

山田先生の発表にクラスの女子たちが大いに盛り上がっている。

俺は、そんな声を無視して寝ていた。

めずらしく、千冬さんも出席簿で叩いてこなかった。

罪悪感でも持ってくれたのだろうか。

気付いたら、昼休みになっていた。

「鯉半”さん、お隣よろしくて」

昼食を食べていると、お盆を持ったセシリアが話しかけて来た。

ちなみに、筍と一夏は自分の昼食を取りに行っている。

「ん、いいぞ」

「失礼しますわ」

セシリアはそう言って隣に座った。

ん？てか、俺のこと名前で呼んでなかったか……？

そんなことを思いながら、食事を続けていると隣から、視線を感じた。

セシリアが、ソワソワしながらチラチラと俺を見ていた。

「なんだ？」

「そ、そのですね……き、昨日のことを謝りたく……わ、わたくしも大人げなかったというか……」

「そんなことか。もう気にしてねえから気にすんな」

気にしてねえよ、と手を振りながら言うと、セシリアは、いきなり嬉しそうな顔をして

「な、なら、鯉半さん！お詫びも兼ねて、今日の放課後から一緒にISの訓練を……」

「その必要はない」

セシリアの声を遮る形で、二つの声が後ろから聞こえた。

後ろを見ると、お盆を持った筈と一夏が異様に殺気立った瞳でセシリアを睨んでいた。

「あいにくだが、鯉半の練習相手なら間に合っている」

「そういうこと。鯉半の練習相手は私たちで十分だ」

そう言いながら、一夏は俺の正面に、筈はセシリアの正面に座った。

「あら、わたくしはお二人ではなく鯉半さんに聞いているのですのよっ」

三人の間に火花が散っている。

どうでもいいが、全員そろって“鯉半”って強調しすぎ。

睨み合いを続けている三人を余所に知らん顔をしてご飯を食べ進めていた。

「「「鯉半（さん）！！」」」

「……ん？」

卵焼きを食べた所で、先程まで睨み合っていた三人が俺に迫っていた。

「「「誰と一緒に練習したいんだ（ですの）！！」」」

勘弁してくれ……

あの後、全員で訓練をするというところで、場を納めたが、三人は不満そうな顔をしていた。

「神裂」

現在、一夏たちとの訓練のためアリーナに向かって廊下を歩いていたら、千冬さんに呼び止められた。

「何ですか？」

「ちょっと来い」

そう言って俺の手を掴んでとっと歩き始めてしまった。

「え、ちよっ！」

そのまま、なすすべなく俺は連れ去られた。

そして、連れてこられたのは非常階段の踊り場。

「お、お前に頼みたいことがあってな」

「は、はあ……」

いつも以上に真剣な表情で言ってくる千冬さん。

「次の休み暇か？」

「は？」

「暇かと聞いている！」

「ひ、暇だけど……」

俺は、千冬さんのあまりにもスゴイ迫力に負けてそう答えた。

まあ、実際暇ではあったが……

「っ！そ、そうか……ならば、出かけるぞ」

「は、はい！」

「約束したぞ！10時にゲート前だぞ！」

そう言っつて千冬さんは足早に去って行った。

キョトンとしてしまっている俺を残して……

そして当日、朝食を終えた後、部屋に戻って準備をしている時、
箒が部屋へと帰ってきた。

「ん、どこかに出かけるのか鯉半？」

私服に着替えた俺の恰好を見て箒が聞いてきた。

「ん、ああ。ちょっとな……」

「……誰と出かけるんだ」

女の感が働いたのか、箒は若干、睨むようにして聞いてきた。

「千冬さんだよ」

「な、なんだと!?!」

ガタンッ!

座っていた椅子を倒しながら立ち上がった箒はものすごい勢いで掴みかかってきた。

が、ぬらりくらりとよけて、ドアへと行った。

「夕方には帰る」

そう言っつて部屋を出てゲートへと急いだ。

Side 箒

鯉半が出て行ってすぐに廊下に出たが、そこにはもう鯉半の姿はなかった。

「そんな……早く、一夏たちに知らせなければ!?!」

私は、一夏、そして今日仲間入りしたセシリアに連絡をして集まった。

「千冬姉が……油断してたっ!!」

「あの織斑先生が……」

セシリアは、あり得ないという感じの顔をしていた。

一夏は、しまったという感じの顔をして俯いていた。

「追っぞ!!」

「「えっ!?!」」

いきなり顔をあげてそんなことを一夏は言った。

「い、一夏……それはまずくないか?」

「そうですね、一夏さん」

私とセシリアは、一夏にそう諭したが一夏は眼を見開いて

「甘い、甘いぞ!!お前たちは知らないから言えるんだ!!」

立ち上がり力説し始める一夏。

な、なんか怖いぞ!!

「千冬姉は昔から鯉半を狙っていたんだ！しかも、二人きりでのデートだぞ！！鯉半が千冬姉に喰われる……」

な、なんだと！！

一夏の言葉に私とセシリアは、驚愕の表情を浮かべていた。

「いくぞ」

「ああ（ええ）」

こうして、私たち三人は鯉半たちを尾行する事となった。

だが、この後、あのようなことになるとはこの時の私は思ってもいなかった……

Side out

扉から逃げた後、ゲートに向かうと千冬さんがすでに待っていた。

「千冬さん、待ちましたか？」

「いや、私もいま来たところだ」

なんとも、ありきたりなデートの待ち合わせのセリフなんだろう。

ん？デートって理解しているのかだって？

だって、キーワードに書いてるだろ？

鈍感じゃないって。

「そうですか。なら、行きますか」

「ああ、そうだな……！！」

俺は、千冬さんの手を握って歩き始めると、千冬さんは顔を赤くして俯いてしまった。

「……鯉半、何だ、その……」

千冬さんが何かを言いたそうにながら顔をあげた。

「どうしたんですか？」

「その、何だ……二人の時は……け、敬語はやめてくれないか？」

なんてことだ……

目の前にいるのは誰なんだ？

少なくとも、俺の知っている千冬さんはこんな上目づかいをしてく

るはずがない！

やばい、スイッチが入りそう……

「……千冬。これでいいか？」

「！！ああ／＼／」

千冬は、とてもうれしそうな顔をして手を強く握ってた。

「で、どこに行くんだ？」

「デパートだ。少し、買う物があったな」

そんなことを話しながら、俺たちはデパートへと向かった。

後ろからついてくる三人を気にしながら……

Side 一夏

私たちは、目の前の光景に呆然としていた。

「あれ誰だ？」

「誰でしょう？」

「……」

あの千冬姉が、あの千冬姉が（重要なので二回言った）あんな嬉しそうな顔をして、鯉半と手をつなぐなんて！！

箒とセシリアは、アレを千冬姉と認識できていないみたいだし……

「ほら二人とも、早く追っぞ！」

今だ、処理落ちしている二人を連れて、追跡を始めた。

S i d e o u t

そして、話は冒頭に戻る。

現在、千冬の買い物に付き合いながら、俺も新しい服を見ていた。

あ、あの織物いいな……

「り、鯉半……これはどつだ？」

「……」

試着室から出て来た千冬の姿に俺は息をのんだ。

その姿は、いつものキツチリとしたスーツ姿とは違い、清楚な白いワンピースの上に、黒の上着を着てた。

不覚にも、俺はその姿を見て見惚れてしまった。

「に、似合わないか……」

「い、いや……そんなことねえよ」

顔をそらしてそう言ったら、千冬は嬉しそうな顔をしていた。

この人は、ホントに千冬なんだろうか。

普段と全然違うんですけど……

「そうかそうか。こういうのが好みか……買おう」

なんか、呟いていたようだが、全然聞こえなかった。

その後も、数着の服を試着しては、意見を求めてきて、その度に何かをつぶやいていた。

千冬が会計に行っている間、装飾品を見ていたら、綺麗な髪留めを発見した。

………よっっ

「今日は付き合わせてすまなかつたな」

「いや、そんなことねえよ。(色々とおもしろいものも見れたし)」

「なにか変なことを考えなかつたか？」

ジト目で睨んでくる千冬から目を逸らすしかできなかつた。

「そ、そんなことより、少し目瞑ってくんねえか？」

話を逸らすかのようにして、千冬に言ったが、今だジト目で見てい

る。
「……仕方がないな。これでいいのか？」

折れてくれた千冬が、目をつぶってくれた。

そして、千冬の髪の毛に手をかけた。

「お、おい！何をする」

「じつとじてる」

抵抗を始めた千冬を押さえて髪をほどき、さっき買った髪留めをした。

「よし、もついいぞ」

「り、りはん……これは……？」

俺の付けた髪留めを触りながら驚いた顔をする千冬。

いつもは見られない新鮮な顔だ。

「さっきデパートだな。千冬に似合いそうだったんでな」

「……がとう」

「あん？」

「あ、ありがとう」

小さく感謝の言葉を紡ぐ千冬が、とても可愛いと思ったのは間違いだろうか？

「気に入ってくれたならよかった」

さらに顔を赤くして俯いてしまった千冬を見て笑ってしまった。

「これはお礼だ、これはお礼だ」

そう言っただけいきなり顔をあげた千冬は俺の服を引っ張り

「んっ」

「!?!」

「「「!?!?!?!?!?!?!?!?!?!」」」

俺の唇に自分の唇を重ねてきた。

そう、マウス・トウ・マウス。

日本語では接吻。英語ではキス。

そして、尾行してきていた者たちの声にならない悲鳴。

数秒して唇を離れた千冬は顔を極限まで赤くして、

「勘違いするな!これはお礼だからな!」

なんて、ツンデレ発言。

「……」

慣れているとはいえ、千冬からしてきたことに驚いて、呆然としてしまった。

「では、帰るとするか」

満足したのか、俺の手を握って帰ろうとする千冬。

だが……

「っと。その前に、私たちを尾行していた無粋な連中に教育的指導をしなくてはな……」

千冬のその言葉に、ビクツとする一夏たち。

あ、やっぱりわかってたんだ千冬。

「では待っている鯉半」

そう言って、千冬は一夏たちの方へと姿を消していった。

しばらくして、スッキリした顔で帰ってきた。

何があったんだ……

「では、本当に帰るとしよう」

「あ、ああ……」

俺は、心の中で、一夏たちの無事を祈って千冬と帰って行った。

その後、正気に戻った一夏たちを買っていたお土産を渡して、機嫌
取ることになった。

和解のC / 千冬の誘い（後書き）

作者は何とか生きています。

津波とかが来ましたが、被害はあまりありませんでした。

今回は、セシリア戦後の話とこの世全ての悪様からのリクエストを織り交ぜた番外編です。

セシリア戦後は、どうしても授業の中での折り合いがつかなく、このような感じになってしまいました。

この世全ての悪様、このような感じになりました。

どうだったでしょうか？

少女R / 新たな幕開け

「ではこれよりISの基本的な飛行操縦を実践してもらおう。神裂、織斑、オルコット。ためしに飛んでみせろ」

四月も下旬、あの千冬とのデートから幾分か経った頃。

千冬の授業を一応まじめに受けていた。

この間の千冬は幻だったのだろうか？

今は、いつものように鬼教官だ。

「早くしろ。熟練したIS操縦者は展開まで一秒とかからないぞ」

鬼教官に（ギロツ）……千冬にせかさされ、意識を集中する。

ISにはそれぞれアクセサリーの形状での待機状態がある。

俺の左腕の腕輪やセシリアのイヤークラス、一夏の右腕のバンゲルなどがある。

俺は意識を集中させて、百鬼夜行を展開し浮かんだ。

隣にいるセシリアはブルーティアーズ、一夏は白式を装備して浮かんでいた。

「よし、飛べ」

言われてからの行動は早かった。

急上昇して、遙か上空で静止した。

少し遅れてセシリア、一夏も到着した。

「やっぱり、速いですわね。鯉半さん」

「そうか？セシリアだって速いと思うぞ」

「あら、嬉しいことを言ってくれますのね。ふふっ」

といった感じで、なんかセシリアといい感じになっている。

あの日から、何かと理由を付けて俺に関わるようになったセシリア。

つい先日には、『畏』の代紋入りの羽織をプレゼントした。

最初のころの態度が嘘みたいな変わり様だ。

今の方がかわいいいな。

「鯉半、なにイチャイチャしてるんだ」

『何をやっている神裂』

『鯉半っ！いつまでそんなところにいる！早く降りてこい！』

セシリアと話していると隣にいる一夏、通信回線から千冬、幕に怒鳴られた。

通信回線を開いている人たちの方を見ると、千冬はインカムを握り潰さん勢いで握り、筈は、山田先生から奪ったインカムに怒鳴っている。その後ろで、山田先生がおたおたしていた。

最近よく見られる光景だ。

いや、本家でもあったような……

束がくっ付いてきて、それを見た氷麗に亜麻乃、冷麗がキレる。

（なぜ、束を呼び捨てで呼んでいるかと言うと、あのデートのあった後、どこから聞きつけたのか電話がかかってきて、「リツくん！ どうしてちーちゃんを呼び捨てで呼んでるの！！ちーちゃんだけズルイ！！私も呼べえ〜〜！！！」といった具合で叫ばれたので、呼び捨てにし始めた）

ああ、俺の周りってどこに行っても変わんねえんだな。

「神裂、織斑、オルコット、急降下と完全停止をやって見せる。目標は地表から十センチだ」

落ち着きを取り戻した千冬が次の指示をしてきた。

「了解です。では鯉半さん、一夏さん、お先に」

「鯉半、先に行ってる」

言っただけのセシリアと一夏の行動は早かった。

二人は、ぐんぐんと地上に向かって行った。

そして、難なく完全停止をした。

それを見届けて俺も急降下を始めた。

『おお~~~~~』

女子からの歓声が広がった。

「ほお、地表ギリギリか。よくやったな」

そう、俺は地表ギリギリでの完全停止をしたのだった。

千冬はそれを称賛してくれた。

「すごいな、鯉半」

「さすがですわ。鯉半さん」

驚いたように言ってくる一夏と微笑みながら言ってきたセシリア。

だが、その間には火花が見えるような気がした。

「次に武装の展開だ。神裂は関係ないな……」

そう、この百鬼夜行は常時武装展開型のI.S。

常に、腰の所に祢々切丸が装備されているのだ。

「では織斑、オルコット、武装を展開しろ」

「はい」

一夏は正面に右手を構え、セシリアは左手を肩の高さまで上げ、真横に腕を突き出した。

一瞬爆発的に光、その手の中にはそれぞれの武器“雪片式型”と“スターライトmk?”が握られていた。

「さすがだな、代表候補生。……だが、オルコット。そのポーズはやめる。横に向かって銃身を展開させて誰を撃つ気だ。織斑のように正面に展開できるようにしろ」

「で、ですがこれはわたくしのイメージをまとめるために必要な…

…」

「直せ、いいな」

「……はい」

セシリアは反論の余地も与えられぬままに千冬のひと睨みによって話が終わってしまった。

「オルコット、近接用の武装を展開しろ」

「えっ。あ、はっ、はい」

頭の中で文句を言っていたのか、反応が鈍るセシリア。

“スターライトmk？”を収納して、新たに近接用の武装を展開した。
クロス

だが、手の中の光はなかなか像を結ばず、空中をさまよっていた。

「くっ……」

「まだか？」

「す、すぐです。……ああ、もうっ！」

千冬言葉にさらに焦り、うまくイメージがまとめれない様だった。

「落ち着けセシリア。心を乱すな」

周りから見れば、いつの間にかセシリアの後ろに回っていた俺はセシリアの耳元で心を落ち着かせるためにつぶやいた。

「は、はひっ！ー！」

顔を赤くさせて驚いたセシリアの手の中にはブルーティアーズの近接用武装“インターセプター”が握られていた。

「……何秒かかっている。お前は、実戦で相手に待ってもらうのか？それとも、そうやって男に耳元でつぶやかれないと武装の展開が

できないのか？」

明らかなジト目をしてセシリアを睨む千冬。

その横と後ろには同じような目をした一夏と篤。

だが二人は、俺を睨んでいる。

「……………」

セシリアはと言うと、顔を赤くさせたまま口をパクパクさせて声にならない声を発していた。

『あ、あなたのせいですわよ！』

いきなりこちらに顔を向けたセシリアからプライベートチャネルが送られてきた。

が、その顔は今だ赤かった。

『なんでだよ』

『あ、あなたが、わたくしの耳元で、さ、囁くから……………』

『なんだよ。せっかく、落ち着かせてやろうと思ったのに』

『そ、それは…………せ、責任を取ってもらいますわ！』

責任を取れって言われてもな…………

「ほう、オルコット……お前は、そんなおしゃべりをしている余裕があるのか？」

地の底から聞こえてくるような声が聞こえた。

セシリアは、その声にビクつき、ゆっくりと振り向いた。

そこには、出席簿を構えた千冬おにが居た。

スパンツ！！

アリーナに、叩かれる音が響いた。

「ふうん、ここがそうなんだ」

IS学園のゲート前に、その小柄な体には似合わない大きなボストンバックを抱えた少女が居た。

少女のきれいな黒髪は、左右それぞれ金色に黒の刺繍が入ったりボンドで結られていた。

「えーと、受付ってどこにあるんだっけ？」

少女は、手に持った紙を見ながらつぶやいた。

「本校舎一階総合事務受付……って、だからそれがどこにあるのよ」
紙を見ながら、多少イライラがあるようだが少女は歩き始めた。
歩きながら少女は、再びこの日本に来た理由を思い返していた。

「（元気にしてるかなアイツ）」

思い出したのは、初恋の男の子。

彼はある事件を境に、自分の前から消えてしまった

だが、彼が去る間際、彼女は彼と会うことができ、彼と約束をした。

そして、このリボンをもらった。

「……から………れる」

IS訓練室の方から声が聞こえた。

声の感じからしたら女子だった。

しかもそれは、少女の知っている声だった。

「（一夏の声？ならもしかして！）」

幼馴染で恋敵の声が聞こえるということはもしかしたらといった思
いが彼女の中に廻った。

「一夏も抑える」

そして、聞こえた彼の声。

「（！！あ、あたしってわかるかな……？さ、三年ぶりだし……）」

そして、声をかけようとしたその時、

「おい、少しは鯉半から離れたらどうなんだ？」

「あら、あなたがそれを言いますの？」

彼を囲む様に知っている女子と知らない女子が立っていた。

「（ 誰あの二人？どうして、鯉半とそんなに親しそうなの…

…？）」

さっきまでの胸の高鳴りが嘘のように静まり返って、逆にひどく冷たい感情と苛立ちが流れ込んできた。

それからすぐ、少女は総合事務受付を見つけることができた。

「ええと、それじゃあ手続きは異常で終わりです。IS学園へようこそ、鳳鈴音さん」

相想のいい事務員の言葉も少女 鈴音の耳には届いていなかった。

鈴音は不機嫌そうに唇を尖らせながら聞いた。

「神裂鯉半って、何組ですか？」

「ああ、噂の子？一組よ。鳳さんは二組だから、お隣ね。そうそう、あの子一組のクラス代表になったんですって」

事務員の言葉を見無視するかのようになり、鈴音は質問を続けた。

「二組のクラス代表って、もう決まっていますか？」

「決まってるわよ」

「名前は？」

「え？ええと……聞いてどうするの？」

鈴音の態度に、事務員は少し戸惑ったように聞き返した。

「お願いしようかと思って。代表、私に譲ってって……」

にっこりと笑い返した鈴音だったが、その目は笑っていなかった。

少女R / 新たな幕開け (後書き)

更新しました。

皆様は一夏のCVは誰がいいと思いますか？

幼馴染R / 夢見る約束

「というわけでっ！神裂くんクラス代表決定おめでとう！」

「おめでとう！」

その掛け声とともに一斉にクラッカーが乱射された。

現在、夕食後の自由時間。

俺は、寮の食堂にいる。

そこには、一組のメンバーが全員揃っている。

各自飲み物を手に持ち盛り上がっている。

「……………」

壁に寄りかかりながら、反対側の壁を見た。

そこには、“神裂鯉半クラス代表就任パーティー”と書かれた紙が
かけてある。

「いやー、これでクラス対抗戦も盛り上がるねえ」

「ホントホント」

「ラッキーだったよねー。同じクラスになれて」

「ホントホント」

訂正。一組のメンバーだけでなく他のクラスの奴もいた。

「人気者だな、鯉半」

「いい御身分だよな、鯉半」

「なにを見てそう思うんだお前らは」

そこに、飲み物を手に持った不機嫌そうな筈と一夏が近づいてきた。

「ふんっ」「」

二人して鼻を鳴らしてお茶を飲み始めた。

「はいはい、新聞部です。話題の新生、神裂鯉半くんに特別インタビューをしに来ました〜！」

いつの間にか、やたらとテンションの高い人が俺たちの間に入ってきていた。

制服のリボンの色を見ると、どうやら二年生のようだ。

「あ、私は二年の黛薫子。よろしくね。新聞部副部長やってます」とか言いながら、名刺を渡してきた。

二年生か……まさか、あの人の知り合いじゃないよな……

「じゃあ早速、クラス代表としての意気込みをどうぞ！」

ボイスレコーダーをずっと向けてきたが何を言おうか……

「まあ、適当にがんばります」

「えー。もっといいコメントちょうだいよ。俺に触るとヤケドするぜ、とか！」

どこの三流役者のセリフだ。

……あれを言うか。

「……相手が強いかなんて関係ねえ。俺が無敵になりやいいんだからな」

目の前の先輩や近くに居た一夏、篤、セシリア。そして、いつの間にか周りに集まっていた女子全員が顔を赤くして固まった。

「……はっ！えっと、セシリアちゃんもコメントちょうだい」

いち早く意識を取り戻した先輩が、セシリアに話題を振った。

しかし、その顔ははまだ赤いままだが。

「え、あ、わ、わたくし、こういったことはあまり好きではありませんが、仕方ないですわね」

先輩の言葉で意識が戻り拳動るセシリア。

だが、心なしかいつもより髪の設定に気合が入っている気がする。

「コホン。ではまず、どうしてわたくしと鯉半さんが戦うことになったのかということから……」

「ああ、長そつだからいいや。写真だけちょうだい」

「なっ！さ、最後まで聞きなさい！」

「いいよ、適当にねつ造しておくから。そつだね、神裂くんに惚れたからつてことにしよう」

「なっ、な、ななっ！」

先程よりも顔を……体全体を真っ赤にしたセシリア。

「まあ、いいや。二人とも並んで。写真撮るから」

「えっ！」

先輩の言葉に、セシリアは嬉しそうな声をあげた。

「ほらほら、もっとくっついて」

カメラを構えながら、手でくっ付いてと諭してくる先輩。

「そ、そつですか……そつ、ですわね」

などと言って、モジモジしながらくっ付いてくるセシリア。

それに比例して大きくなっていく殺気。

「あの、撮った写真は当然いただけますよね？」

「そりゃもちろん」

「でしたら今すぐ着替えて……」

「時間かかるからダメ」

シユンとなってしまうたセシリア。

そんなセシリアの頭を撫でてやると、気持ちよさそうに目を細めた。

「……………」

「なんだ？」

「何でもない」

羨ましそうな目でセシリアの頭を撫でている手を見てきている二人。

まあ、これ位ならあとでやってやるから。

「それじゃあ撮るよー。35x51÷24は？」

「74、375」

「せいかい」

パシャツとカメラのシャッターが切られる。

「おいおい、すげえなお前ら」

周りを見てみると、いつの間にかクラスの全員が俺たちの周りに集まり、写真に写っていた。

「あ、あなたたちねえっ！」

「まーまーまー」

「セシリアだけ抜け駆けはないでしょー」

「クラスの思い出になっていいじゃん」

「ねー」

「う、ぐ……」

といった感じで丸め込まれてしまったセシリアだった。

あの後、十時過ぎまで『神裂鯉半クラス代表就任パーティー』は続いた。

「今日は楽しかっただろう。よかったな」

とげとげしい口調で風呂上がりの箒が言ってきた。

「そうか？まあ、本家の宴に比べれば楽だったが……」

「ふん」

さらに不機嫌そうな雰囲気を出す箒。

そんな箒を気にしながら、ベットへと倒れこんだ。

「……その帯、使ってくれてるんだな」

「あ、ああ。鯉半からのプレゼントだからな」

箒は嬉しそうに帯を触りながら笑っていた。

この間のプレゼントは気に入ってくれたみたいだな。

「うれしいねえ。そんなに気に入ってもらえるなんてな」

くつくつと笑いながら言ったら、箒は顔を赤くして枕に顔を埋めてしまった。

「~~~~~！寝るぞ……！」

「はいはい」

そのまま消灯して、ひと時の静寂が訪れた。

「なあ、鯉半」

「んっ？」

「さっきは、すまなかった」

「……気にしてねえよ」

「そ、そうか。それなら、いい。……ではなっ」

「ああ、おやすみ筈」

少しずつ意識が薄れていき、眠りに就いた。

『行かないでよ、鯉半!』

懐かしい夢を見ていた。

『ごめんな……』

これは、俺が本家に引き取られる日だったな。

『もう会えないの……?』

涙を流しながら俺を見つめてくる少女。

俺はそんな少女の髪をほどき、新しいリボンで縛った。

『えっ?』

『これを預ける。だから、再会した時に……』

『うん、うんっ。なら、次に会う時までにあたしも………になってるから、そしたら、毎日あたしの………くれる鯉半?』

『ああ、約束だ』

『うんっ、二人だけの約束だよ!』

夢はそこで終わった。

「神裂くん、おはよー。ねえ、転校生の噂聞いた?」

朝、席に着くと近くのクラスメイトにそう言われた。

「へえ、この時期にねえ………」

「なんでも中国の代表候補生なんだってさ」

中国か……

そう言えば、あいつも中国出身だったな。

「あら、わたくしの存在を今更ながらに危ぶんでの転入かしら」

いつの間にか近くに来ていたセシリアが、腰に手を当てながら話に入ってきた。

「いや、私も一応代表候補生なんだけど……」

これまた、いつの間にか近くに来ていた一夏が腕を組みながらそう言った。

「このクラスに転入してくるわけではないのだろうか？騒ぐほどのことではあるまい」

さらに、先程まで自分の席（窓側の最前列）に居たはずの箒まで近くに来ていた。

お前ら、いつからそんなに隠密活動ができるようになったんだ。

「中国のか……」

「むっ……気になるのか？」

「……まあな」

「……ふん」

箒から聞いてきたのだが、不機嫌になってしまった。

一夏、セシリアからも不機嫌なオーラが出ている。

「なんだ、やきもちか？」

妖艶な笑みを浮かべら言うと三人は顔を赤くした。

「っち、違う（いますわ）」「っ」

三人そろえて声をあげる。

最近、息が合っているよなこの三人。

「三人だけズルイよ」

「そっだよ〜！いつも神裂くんを独占して〜」

いつの間にか集まっていた女子たちにより攻められる三人だった。

一通り三人を攻め終わった女子たちの矛先がこちらに向いた。

「神裂くん、優勝目指して頑張つてよ〜！〜」

「フリーパスのためにもね！〜」

「今のところ専用機持つてるクラス代表って一組と四組だけだから、余裕だよ」

やいのやいのと周りで騒ぐ女子たち。

さきほどまで攻められていた一夏たちはなんか睨んできてるし……

「その情報、古いよ」

教室の入り口の方から声が聞こえた。

「二組も専用機持ちがクラス代表になったの。そう簡単に優勝できないから」

腕を組み片膝を立ててドアにもたれかかっていたのは、今朝夢の中に出てきた幼馴染だった。

「鈴……？お前、鈴か？」

一夏のつぶやきが聞こえた。その声からは、驚きがうかがえた。

「久しぶりね、一夏。中国代表候補生、凰鈴音。今日は宣戦布告に来たってわけ」

ドアから体を離し、こちらに向かってきた鈴。

俺の席の前まで来てこちらを見ながらふわりと笑った。

「ひ、久しぶり、鯉半。元気にしてた？」

「ああ。鈴こそ元気にしてたか？」

「う、うん……」

モジモジし俯いてしまった鈴の頭を撫でた。

「あっ……」

それを、気持ちよさそうに目を細めながら受け入れた鈴。

な、なんだこの……貴重な野生の猛獣を手の中に収めたような気持ち
ちは……

「おい、何をしている」

スパンツ！！

鈴の頭をわしわしと撫でていると、鈴の頭に出席簿が炸裂した。

「にゃ……！！」

鈴は、猫の様な声をあげて涙目になりながら頭を押さえていた。

「もうSHRの時間だ。教室に戻れ」

「ち、千冬さん……」

「織斑先生と呼べ。さっさと戻れ、そして入り口を塞ぐな。邪魔だ」

「す、すみません」

そういえば、昔から千冬のこと苦手だったんだっけ鈴？

「またあとで来るからね！逃げないでよ、鯉半！！」

そう言って教室から出て行った鈴。

なんて言うか、悪役の捨て台詞みたいだな。

「……鯉半。今のは誰だ？知り合いか？偉く親しそうだったな？頭を撫でるほど親しいのか？」

「り、鯉半さん！？あの子とはどういう関係で？頭を撫でるなんて

……」

「鯉半！なんで鈴の頭を撫でたんだよ！！」

箒、セシリア、一夏を筆頭に、次々と質問が飛び交う。

スパンツスパンツスパンツ！！

「席に着けバカども」

千冬の出席簿が火を噴いた。

こうして今日も一日が始まった。

幼馴染R / 夢見る約束（後書き）

お久しぶりです。

更新しましたよ……

今回は、所々いろいろな作品のセリフを入れてみました。
分かるかな……？

活動報告でアンケート取ってるんで協力お願いします。

期限は4月1日までで。

短編のリクエストの方もお待ちしておりますm()m

Rの宣戦布告／戦いの前の日常

「」「鯉半(さん)のせいだ!」「」

「なにがだよ……」

昼休みになったとたん、一夏、箒、セシリアに文句を言われた。

この三人、午前中の授業だけで山田先生に五回注意され、千冬に三回叩かれていた。

「それより、学食に行くぞ。席がなくなる」

そんなことを気にしないで、さっさと学食に行くことにした。

後ろでは一夏たちが文句を言っているような気がするが、無視だ無視。

食堂につき、それぞれ券売機で自分の昼食を買った。

そろそろ自分で昼食ぐらい作ろうかな？

栄養が偏ってきてる様な気がするし……

ちなみに、今日は和食セットにした。

「待ってたわよ、鯉半!」

昼食を持って席に着こうとしたら、鈴が目の前に立ちふさがって

た。

今朝は、あまり気にしていなかったが、よく見ると鈴は俺が渡したリボンを使ってくれているみたいだ。

「鈴、通行の邪魔になってるぞ」

「う、うるさいわね。わかってるわよ」

と言いつつ、隣に来て一緒に歩き始めた。

「なんで着いてくる」

「べ、別にいいでしょー!」

後ろからは、明らかに不機嫌ですといった雰囲気を出している一夏と殺気を出している筈とセシリアが付いてきていた。

「で、三年ぶりだな……きれいになったな鈴」

「そ、そう……り、鯉半こそかつこよくなってんじゃない」

鈴は顔を赤くしながら俯いた。

周りから見たら、このやり取りはカップルのように見えているだろう。

しかし、これをよく思わない者たちが居る。

「鯉半、そろそろどういう関係か説明してほしいのだが」

「そうですね！鯉半さん、まさかこちらの方と付き合ってたっしやるの!？」

「鯉半、鈴!!なんでイチャイチャしてるんだよ!!！」

今まで蚊帳の外だった篝たちが棘のある声で訊いてきた。

「べ、べべ、別に付き合ってる訳じゃ……」

顔を赤くしてセシリアの言葉を否定し様とする鈴。

そんな鈴の姿を見て、からかいたくなってしまった。

俺は、鈴の後ろに回り後ろから鈴を抱きしめるようにした。

「連れないなあ鈴。俺と鈴の仲だろ？」

「ふにゃ!!！」

「「「んなっ!?!?!?!?!?!?!?!?!?!」」」

鈴の耳元で囁くと、鈴は猫の様な声を出した。

それを見た一夏たちも、変な声をあげていた。

「な、なな、何をやっているんだ鯉半!!！」

「り、鯉半さん!!何をやってますの!!！」

「り、鈴！！鯉半から離れろ！！」

箒とセシリアはうるたえ、一夏は俺と鈴の間に割って入ってきた。

そのまま、鈴を離して一言。

「ま、こんな感じだ」

「「「どんな感じだーーーー！！！！！！」」」

「で、どんな関係なんだ」

落ち着きを取り戻した箒が睨みながら聞いてきた。

その隣に居るセシリア、一夏も一緒に睨んでいる。

だから、悪かったって言っただろ……

「幼馴染だ。箒が引越した後に転校してきたな」

俺の言葉が信じられないのか、箒は一夏の方を見た。

見られた一夏は頷いていた。

「鯉半、誰この人？」

「篠ノ之箒。前に話したことあるだろ？もう一人の幼馴染」

「ふうん、そうなんだ……」

先程まで機嫌がよかったのに、幼馴染と言う言葉を聞いたとたん不機嫌そうな顔になった。

「初めまして。これからよろしくね」

「ああ、こちらこそ」

そう言っただけ挨拶を交わす二人だったが、お互いに目が笑っていない。

「ンンンッ！わたくしの存在を忘れてもらっては困りますわ。中国代表候補生、鳳鈴音さん？」

「……誰？」

「なっ！？わ、わたくしはイギリス代表候補生、セシリア・オルコットですよ！！まさかご存じないの？」

「うん。あたし他の国とか興味ないし」

「な、な、なっ……！？？」

顔を赤くして言葉に詰まるセシリア。

「いい、言っておきますけど、わたくしあなたのような方には負けませんわ！！」

「そ。でも戦ったらあたしが勝つよ。悪いけど強いもん」

妙に余裕と言った感じの鈴。

「……………」

「い、言ってくれますわね……………」

箒は無言で箸を止め、セシリアはわなわなと震えながら拳を握りしめた。

そんな二人の視線を受けている鈴は、何食わぬ顔でラーメンをすすっていた。

「なあ、鯉半」

「なんだ？」

「あれ、ほっといていいのか…………？」

「さあ？」

一夏にそう言われたが、俺は気にせず味噌汁をすすっていた。

放課後の第三アリーナ。ここではセシリア、一夏といつもISの訓練をしている。

だが、今日は籌も加わり、なぜか3対1で戦うことになってしまった。

苦戦はしたが、ギリギリで勝つことができた。

てか、なんであんなにコンビネーションいいのあの三人。

ピットへ戻りISを解除して休んでいるとスライドドアが開いた。

「鯉半っ！」

鈴が入ってきた。

「おつかれ。はい、タオル。飲み物はスポーツドリンクでいいよね」

その手には、タオルとスポーツドリンクがあった。

それもらい、ありがたく使わせてもらった。

「すまねえな鈴」

疲れた体にスポーツドリンクがしみわたる。

「……それ」

「……？」

スポーツドリンクを飲みながら鈴を見ていてあることに気が付いた。

「リボン、使ってくれてたんだな」

「うん。鯉半との繋がりだから……」

鈴はリボンを触りながら顔を赤くしていた。

「なにをしている」

地の底から聞こえてくるような声が入口の方から聞こえた。

そこには

「いやな予感がしたから急いで来てみたが……」

「ハハハ、鈴……昔の約束はワスレタノ？」

「鯉半さん……あなたという人は」

目のハイライトが消えた筈と一夏とセシリアが居た。

「い、いきなりなによ！あんだ達……」

「それはこちらのセリフだ。なに、鯉半といい雰囲気になっているんだ」

「そんなの別にいいでしょ……」

「……よくない)ですわ(……」

なんかとてつもない雰囲気になってきた。

「早く着替える鯉半。私たちの部屋へ帰るぞ」

箒がとてつもない爆弾を落とした。

「……鯉半、どういふこと？」

「どつって……」

「わからなかったのか？私と鯉半は同じ部屋に住んでいるのだ」

「なんで!？」

「それは、私が幼馴染だからだ」

いや、幼馴染とか関係ないだろ。

ただの振り分けミスだろ。

「……じゃない……だって……なのに」

俯きながら何かを言っている鈴。

「鯉半っ!!!」

「な、なんだよ?」

「クラス対抗戦で私が勝つたら……私と同じ部屋になりなさい!!」

いきなり顔をあげたと思ったら指をピシッと俺に向けながらそう宣言した鈴。

突然のことで全員が呆然としている中

「そ、そんなことが認められるか!」

「ずるいぞ鈴!!私だって我慢しているのに!!」

「そうですね!」

口々に、己の欲望を言う筈たち。

「なに?あんだ達は、鯉半が勝つっていうことは考えないの?まあ、勝つのは私だけど……」

鈴の悠々とした態度にカチンと来た三人。

「そんなわけあるか、勝つのは鯉半だ」

「そうだな。鯉半が勝つに決まっている」

「そうですね。なんと言っても鯉半さんはこのわたくしにも勝利している方なんですから」

……なんか俺のことなのに、全然関わっていない。

「じゃあ、文句はないよね。そういう事だから鯉半、クラス対抗戦覚悟しといてね」

俺に向かってウインクをしてピットから出て行った鈴。

「「「鯉半(さん)!!」「」」

「お、おう」

「「「負けたら承知しないからな(しませんからね)!!」「」」

なんか本当に大変なことになった……

翌日、クラス対抗戦日程表が貼り出された。

一回戦の相手は二組……鈴だった。

おまけ

乙女日記

四月 日

鯉半が妾に何も言わずIS学園に行ってしまった。
べ、別に会えなくなっただのが寂しいわけじゃないぞ!!

四月× 日

父上に妾もIS学園に行きたいと申ししてみた。
最初は渋っていた父上だったが、許可をくれた。
け、決して、ISで脅したりなんかしてないからの!!

四月× 日

今だにIS学園への転入ができない。
なぜじゃ？
早く、鯉半に会いとうてしかたない……

五月 日

やっと、IS学園に行けることになった!!
これで、鯉半に会える。
だが、妾の女の感が告げておる。
鯉半に悪い虫が付いていると……
ふふふ、待っておれ鯉半。
妾が全部掃うてくれるからの……

Rの宣戦布告／戦いの前の日常（後書き）

更新お待っとさんでした。

ついにここまで来ました。

一巻もついに佳境……

鈴との勝負の行方は！

そして、次回ついに百鬼夜行の真の力が……！

たくさんのお要望があったので、乙女様のおまけを載せてみました。
本編登場はちょっと待ってね。

Rの想い／装甲龍の双牙

あれから数週間、鈴からのアプローチは凄まじかった。

暇があれば一緒に行動をしたり腕に抱きついてきたり背中に抱きついてきたりしてきた。

それを見た篤や一夏には斬りかかれ、セシリアには撃たれた。

そして、嫉妬した篤が布団の中に潜り込んできたこともあった。

その時は、束の妹だと思っていたのは秘密だ。

クラス対抗戦当日。

第二アリーナは噂の新生同士との戦いとあって全席満席だった。

『それで両者、規定の位置まで移動してください』

アナウンスが入り、俺と鈴は移動し空中で向かい合った。

「さあ、鯉半覚悟しなさい！」

オープン・チャンネルから聞こえてくるのはやる気満々の鈴の声。

そんな鈴を見て、俺はため息を吐いた。

『それでは両者、試合を開始してください』

ブザーが鳴り響いた瞬間、俺と鈴の得物が交差した。

祢々切丸が鈴の手にしている異形な青竜刀によってはじき返された。

「へえ。やるわね鯉半」

そう言いながら鈴は両刃青竜刀をバトンのように回しながら斬り込んで来た。

「（ちつ。厄介だな……一旦離れるか）」

祢々切丸で両刃青竜刀をさばきながら距離を取ろうとした。

「甘いっ！」

「っ!!！」

鈴の肩アーマーがスライドして開き、その中の中心の球体が光った瞬間、目に見えない衝撃により俺は弾き飛ばされた。

弾き飛ばされた体を空中で何とか体勢を立て直した。

「今のはジャブだからね」

不敵な笑みを浮かべている鈴。

再び、肩のアーマーの球体が光った。

俺はそれを間で避けたが、肩のアーマーにダメージを負った。

「へえ……さすがだね鯉半。……でもいつまで続くかな？」

Side 一夏

「なんだあれは……」

ピットで一緒にリアルタイムモニターを見ていた箒がつぶやいた。

「『衝撃砲』ですわね」

「ああ、空間自体に圧力をかけて砲身を生成、余剰で生じる衝撃それ自体を砲弾化して撃ち出す……鯉半には相性が悪いな」

一緒にモニターを見ていたセシリアと一緒に箒に説明をした。

しかし、箒は聞いていなかった。

すでにその視線は、モニターに映る鯉半の姿を見ていた。

「（鯉半……がんばれっ）」

私はモニターを見ながら、心の中で鯉半の無事を祈った。

Side Out

「よくかわすじゃない。衝撃砲“龍砲”は砲身も砲弾も目に見えないのが特徴なのに」

あれから、何とかかわしてきたがダメージは蓄積されてきていた。

だが、“見えない”攻撃ができるのはなにも鈴だけじゃない。

セシリアとの試合が終わった数日後の昼食の時だった。

「鯉半さん」

「どうしたセシリア？」

「あの時、どうしていきなり姿が見えなくなったのですか？」

セシリアが言っているのは、あの試合で俺がセシリアに使った“明鏡止水”のことだろう。

「ああ、あれは“明鏡止水”って俺は呼んでいる業だ。まあ、一種のステルス機能の様なものだと思ってくれ」

実際は、“俺”が持つ“業”なんだが、ごまかした方がいいだろう。

「ハイパーセンサーにも感知されないんですの？」

「まあな。相手と機械に認識をさせないそついった能力なんでね」

そんなことを思い出しながら、俺は再び祢々切丸を構えた。

「鈴」

「なによ？」

「少し本気を見せてやる」

鈴の目を真剣に見つめそつ言い、目をつぶり心を鎮める。

「な、なによ……そんなこと、当り前じゃない……さあ、かかってきなさい鯉半！……」

鈴は両刃青竜刀をバトンのように一回転させて構え直した。

「いくぞ」

そう言った瞬間、鈴の目の前から俺の姿が消えた。

「なっ、どこ!?!」

明鏡止水を発動させて鈴の後ろに移動し解除した。

「なっ!?!」

「終わっ!?!」

袂々切丸を振り下ろそうとした瞬間、アリーナ全体に大きな衝撃が走った。

衝撃のあったステージの中央を見るとそこからは煙が上がっていた。

そんな中、鈴からプライベート・チャンネルが入った。

『鯉半、試合は中止よ!すぐにピットに戻って!』

「そうしたいが、無理みたいだな」

所属不明IS。こちらをロックしています。

百鬼夜行が知らせてくる警告。

べつやら、簡単には帰らせてくれないようだ……

「鈴、俺が時間を稼ぐ。お前は戻れ」

「ちよっ！！何勝手なことやってんのよ！！」

近くに寄ってきた鈴が吠える。

「こんな異常事態、すぐに学園の先生たちがやってきて事態を収拾……」

「っ！鈴！！」

突如放たれて熱線を鈴を抱えてギリギリで回避した。

「ちよっ、ちよっと鯉半！！」

「暴れるな……」

腕の中で暴れる鈴をなだめようとしている中、再び熱線が放たれた。

鈴を抱えながら避け、放たれた方を見た。

煙の中からあらわれたのは、全身装甲のISだった。

「さてと、どうする鈴？」

「そうね、簡単には返してくれそうにないし」

鈴とどうするか話している中

『神裂くん！凰さん！今すぐアリーナから脱出してください！すぐに先生たちがISで制圧に行きます！』

山田先生の通信が割り込んだ。

「いえ、俺達で抑えます。いいな鈴」

「誰に言ってるのよ。それに、あたしと鯉半の二人でやるんだから余裕よ」

「ふっ」

『だ、ダメですよ！神裂くん！！生徒さんにもしものことがあったら……』

敵ISが動き山田先生の言葉はそこまでしか聞けなかった。

「いくぞ鈴。援護頼むぞ」

「わかったわ」

お互いの武器の切っ先をぶつけ合う。

それが合図となり、戦いの火ぶたが切って落とされた。

S i d e セシリア

「織斑先生！わたくしにISの使用許可を！！」

「千冬姉！私にもISの使用許可を」

わたくしと一夏さんは鯉半さんの援護に向かおうと織斑先生にISの使用許可を頼んだ。

「そうしたいところだが、これを見る」

そう言っただけでブック型端末を見せてきた。

「遮断シールドのレベルが4に設定………？」

「しかも、ドアがすべてロックされてる………まさか！！」

「そうだ。あのISの仕様だ。そのおかげで、避難する事も救援に向かう事も出来ない」

冷静に言っているように見える織斑先生だったが、その手はイラストを抑えるかのように忙しなく画面を叩いていた。

この人も、鯉半さんを心配しているんだ。

「現在、三年の精鋭がシステムクラックを実行中だ。遮断シールドを解除できれば、すぐに部隊を突入させる」

「………遮断シールドをどうにかすればいいんだな千冬姉」

「そつだ。……一夏お前まさか」

「私の“零落白夜”なら」

そつか!!

一夏さんの零落白夜は確かエネルギーの無効化能力がある。

それなら、遮断シールドも!!

「……わかつた。お前たちに任せる」

「ほ、本当ですか!!」

「だが、無理はするな」

「わかつた」

「わかりました」

織斑先生からの許可も下り、アリーナに向かおうとした時あることに気が付いた。

「あら？篠ノ之さんは？」

Side Out

「鈴、これで何回目だ？」

「さあ、でもかなり避けられてるわよ」

鈴とのエレメントで何回か攻撃を仕掛けたが、すべて回避された。

「ねえ、鯉半。あんたさっきの消えるやつ出来ないの？」

「出来るが、あれには通用しないぞ」

「どづいつ事？」

鈴が首をかしげながら聞いてくる。

くっ、戦闘中に不謹慎だがかわいいじゃねえか。

「あれ、無人機なんだわ」

「なっ！！あ、あり得ないわよ。ISは人が乗らないと絶対に動かない」

「だが、現に奴は動いている。これは事実だ」

あり得ないといった顔をしている鈴。

「どづいたらいい鯉半？」

俺の目を見て『なんでも手伝わよ』と言ってくる鈴。

「……………」

俺が口を開こうとした瞬間、アリーナのスピーカーから大声が響いた。

「鯉半っ!!!!」

「なっ、箒!なんでそんなところに!!!!」

中継室の方を見るとマイクを持って叫んでる箒の姿があった。

「男なら…………男なら、そのくらいの相手に勝てなくてなんとする!!」

「……………」

嫌な気配を感じて敵ISの方を見ると、じっと箒の方を見ていた。

そして、砲口のついた腕を箒に向けようとしていた。

「クソがつ!!!!」

俺は瞬時加速を限界速度で使い、箒と敵ISの間に入った。

「「鯉半!!!!」」

「がはっ」

敵ISの熱線が肩を切り裂いた。

「鯉半大丈夫!？」

鈴がすぐさまよってきて聞いてきた。

ちっ、思いのほかキツイな……

「大丈夫だ」

「バカ、どう見ても大丈夫じゃないでしょ!!」

肩の傷からは血が流れ続けている。

鈴の心配そうな顔が目に入る。

「……鯉半、あたしがアイツを抑えるから逃げて」

「何言ってるんだ!お前だけじゃ」

「あたしは!あんたを守りたい!!」

泣いている。

鈴が泣いている。

「目の前に鯉半がいるのに!!また守れない……もうあんな思いはしたくないの!!」

鈴の心からの叫び。

あのテロの時のことをまだお前は……

俺は……

「鈴、お前は守らなくていい」

「えっ………!?!」

「けど、そのかわり………お前の“思い”と“力”俺にかしてくれねえか?」

お前の気持ちに答える。

「え?えっ?」

困惑している鈴。

まあ、これだけじゃわかんねえだろうけど……

「だから、お前のその“心”も“体”も俺に全部預ける!!」

「えっ!?!ちよっ!鯉半!!」

顔を赤くさせながら、「心!体!」と言って困惑している鈴を余所に、俺は敵IISと向き合った。

「いくぞ鈴。俺のためにお前の力を解き放て」

鈴を抱きよせながら、そう言った。

「えっ、あつ、わかったわよ!!」

鈴が、力を込めるとそれは起こった。

「（何この感覚……まるで、鯉半と一つになるような温かい感じ……）」

「これが俺とお前の力だ」

“鬼纏 装甲龍の双牙”

そこには、元の装甲に鈴の両刃青竜刀と衝撃砲が追加された姿があった。

そこからは一瞬だった。

手にした袂々切丸と両刃青竜刀を手に、衝撃砲を使った瞬時加速で相手の懐に一瞬で入り右手と足を切り裂いた。

しかし、敵ISは残った手をこちらに向けていた。

「後は任せたぞ……一夏、セシリア」

『了解ですわ！鯉半さん!!』

『了解！鯉半!!』

一夏の白式の零落白夜が遮断シールドを無効化し、

セシリアの駆るブルー・ティアーズの狙撃が、敵ISに注がれた。

俺は、敵ISが落ちて行くのを見ながら、鬼纏を解いた。

「ちょっと鯉半!!今のなによ!!」

鈴が何か言ってるようだが、意識が朦朧としてきた……

血……流しすぎたな。

「鯉半?鯉半!!」

その声を最後に、俺の意識は暗闇に包まれた。

「……………」

目が覚めた時、俺は保健室に居た。

「目が覚めたようだな」

体を起こし横を見ると、そこには千冬が居た。

「肩の傷は数週間で完治するそうだ」

「そっか……………」

いまだ、血が足りずぼうつとする頭で千冬の話聞いていた。

「今は寝ている。疲れただろ？」

「そうさせてもらっ……」

千冬 of 言葉に甘えて、すぐに横になり目を閉じた。

「私も、心配していたのだからな」

意識が薄れて行く瞬間、千冬 of 言葉が聞こえた。

なんだ……人の気配がする……

気になったんで目を開けてみると、鈴の顔が目の前にあった。

「何やってんの？」

「にゃあああああああ！！な、何いきなり起きてんのよあんた！！」

顔を赤くさせて後ずさりする鈴。

驚いたのはこっちなんだが……

「はあ。で、何しに来たんだよ？」

「うっ……あんたが心配だったから……」

ベッドに座り、何やらモジモジし始める鈴。

かわいいな、おい。

「ねえ、鯉半。約束覚えてる？」

「……ああ、『料理が上達したら、毎日あたしの酢豚食べてくれる？』だろ？忘れねえよ」

「え、あ、う……」

しどろもどろしながら俯いてしまった鈴。

そんな鈴の頭を撫でながら

「うまくなったか？」

「あっ、当り前でしょ……！」

「そうか」

そのまましばらく頭を撫で続けた。

鈴も気持ちよさそうに受け入れていた。

「そっぴや、親父さんは元気か？」

「あ……あのね、鯉半……あたしの両親、離婚しちゃったんだ」

「……」

鈴は顔を伏せながら言っていたので、表情は分からなかったがその声からは悲しみが伝わってきた。

「一応、母さんの方の親権なのよ。ほら、今ってどこでも女の方が立場上だし、待遇もいいしね。だから……」

今にも泣きそうな鈴を、なにも言わず抱きしめた。

「り、鯉半……?」

「なにも言っな……今は泣け」

「りはん……う、うわあああ……あああああ」

胸の中で泣き始めた鈴を抱きしめ続けた。

「ぐすっ、みつともないとこ見せてごめんね、鯉半」

「そんなことねえ。泣きたいときには泣くべきだ」

しばらくして、泣きやんだ鈴だったが、その目はまだ赤かった。

「鯉半は優しいね」

俺の右手を握りながら、下から上目遣いをして覗き込んでくる鈴。

その行為が、俺の理性を削る。

「りはん……」

そして、目をつぶって少し顔を突き出してくる鈴。

これはあれか？

やってしまってもいいのか？？

「鈴……」

スイッチが半分入ってしまった俺は、鈴が求めることをしようとした。

あと、数センチで唇が重なるといったところで、突如として保健室のドアが開いた。

「鯉半さん、具合はいかがですか！このわたくしが看護に……！？」

「鯉半！起きてるか？看病しに来た……！？」

「鯉半、私が看病をしてやる……！？」

そこに居たのは、セシリア、一夏、箒だった。

あっ、死んだかも……

「「何をやっているんだ（ですの）！！」「」

「あんたたちこそ何よ！！見てわかんないの！！空気読みなさいよ！！！！」

不毛な争いを始める四人。

ここ、保健室なんだけど……

四人の争いは、保健室の先生に怒られるまで続いた……

「まったく、お前というやつは……」

部屋に戻り、愚痴愚痴と文句を言ってくる箒。

「だから、あれは誤解だ。偶々だ」

「どうだか……」

いまだ不機嫌な箒をどうにかしようとして試行錯誤している時、ノックで遮られた。

「あー、篠ノ之さんと神裂くん、いますかー？」

こちらの返事をまたずに山田先生がドアを開けて入ってきた。

「どうしたんですか、先生？」

「えっと。部屋の調整が付いたんで、篠ノ之さんは今日でお引越
しです」

私もお手伝いしますんでと言いながら準備をしようとする山田先生。

うん。実に早い……

「ちょ、ちょっと待ってください。それは、今すぐでないといけな
いんですか？」

「いつまでも年頃の男女が同室で生活をするというのは問題があり
ますし……」

「い、いや、私は……」

「……先生。今日はもう遅いですし、明日ではだめですか？」

喰い下がろうとしている筈に助け船を出すことにした。

「え、でも……」

「一日くらいです。それくらいなら問題ないでしょ？」

「えっと……わかりました。なら、明日はちゃんと引っ越しですよ」

何とか、山田先生を言いくるめることに成功した。

山田先生が出て行った後、俺は箒と向き合った。

「り、鯉半？」

「感謝しろよ……」

「あ、ありがとう……」

シャワーも浴び終わり後は寝るだけとなったころ、のどが渴いたので飲み物を買に行こうとした。

箒は、あの後ずっと何かを考えている。

部屋を出て歩いている時、誰かに腕を掴まれた。

振り返ると、そこに居たのは箒だった。

「箒？」

「り、鯉半。お、お前に言っておきたいことがある」

なんで廊下で？

部屋でもいいだろう……

「ら、来月の、学年別個人トーナメントだが……」

顔を赤くさせながら言葉をつづける筈。

「わ、私が優勝したら……っ、付き合ってもらおう……！」

「……はっ？」

この宣言が、のちにとんでもないことになるとは、俺も筈も知る由もなかった……

Rの想い／装甲龍の双牙（後書き）

お久しぶりです。

今回は、一週間以上かかってしまいました……

ついに今回は、百鬼夜行のワンオフ・アビリティーである鬼纏が発動しました。

かっこいいですね。鬼纏……

来訪者T / 束の間の休息

Side 一夏

六月の初頭。

その日私は、中学の時の友達である五反田食堂（弾の実家）に来ていた。

「なあ、一夏……そのな……」

「どうしたのさ？」

「蘭がな……」

「蘭がどうしたんだ？」

歯切れの悪い弾。一体、蘭がどうしたというんだろう。

「そのな……好きな奴が出来たみたいなんだ……」

「……はあ？」

その言葉を聞いて呆れてしまった。

そんなの、年頃の女の子だったら普通だろ。

「そんなことかよ」

「そんなことじゃねえよ!! あいつ、ずっと惚けててときどきさいつの名前をつぶやきながらニヤケてて……怖いんだよ!!」

そんなこと言われてもなあ……

私も、似たようなところあるし……

「お前からも言ってくれよ! あの有名人は無理だって!!」

「はあ? 有名人……?」

芸能人かなんかなのか?

「あの、世界で唯一の男のIS操縦者の神裂鯉半は!!」

ビキッ

その言葉を聞いて私は固まった。

今、弾はなんと言った。

鯉半だって……?

なんで蘭は鯉半のことを知っているんだ。

ていうか、鯉半はまたフラグを立てたのか?

「ねえ、弾……」

「ど、どうしたんだ、一夏……?」

アレ？どうしたんだろ弾は？

ものすごく顔色が悪くなってるよ？

「蘭はドロかな？かな？？」

「ひっ！……じ、自分の部屋だと思っぞー！..」

「そっか……」

そう言っつて私は蘭の元へと向かった。

フッフ、マツテテネ、ラン。

「はぁ……鯉半さん」

蘭の部屋からそんな声が聞こえてきた。

やっぱり、鯉半はフラグを立ててたみたいだな……

「蘭……？」

「ひゃーい、一夏さんー！..」

ドアを開けて蘭に声をかけると、蘭は跳ねるようにこちらを見た。

「ど、どうしてここに??」

「弾に呼ばれてね……」

なぜか怯えたような感じを出している蘭。

なんで怯えるのかな？

「そ、そうなんですか……」

「うん。それより蘭、なんでさっき鯉半のこと呼んでたの??」

「え！あつと……それは……」

顔を赤くしながらしどろもどろし始める蘭。

うん。完璧にフラグ立ててるな、鯉半。

「前に、街でしつこくナンパされてるところを助けてもらって……」

ふん。

鯉半らしいったら鯉半らしいけど……

後輩を救ってくれたのはうれしいよ？

でも、私の乙女心がなんか許せない……！

「あ、あの一夏さん！」

「なにかな？」

「えっと……鯉半さんにお礼を言いたいで、アポ取ってもらえないですか？」

うっ。どうしよう……

わたしが悩んでいると、携帯が鳴り始めた。

「あ、ちよつとごめん」

携帯を開き、画面を見ると鈴からの電話だった。

「もしもし？どうしたの、鈴？」

『一夏！今どこに居るの！！』

鈴の叫び声が携帯から聞こえ、私は思わず携帯から耳を離れた。

「ちよつと鈴。声でかい」

『そんなこと言ってる場合じゃないわよ！今すぐ合流しなさい！』

何なんだろう……

「主語を言ってもらわないとわかんないんだけど……」

『いいから駅前に来なさい！鯉半が！！』

「鯉半がどうしたんだ!!」

鈴の言葉に、私も思わず大きな声を出してしまった。

そして、隣に居た蘭は鯉半という名を聞いて私と鈴の会話に興味を持ってみたかった。

『鯉半が、知らない女と出かけたのよ!!』

……どうやら、OHANASHIが必要みたいだね、鯉半。

Side Out

うっ!?

なんか、寒気がした……

「どうしたんですか、鯉半さま？」

「いや、なんでもねえよ。氷麗」

隣に居た氷麗が心配そうに聞いてきたが、俺はなんでもないと断った。

なんで、氷麗と一緒に居るかって？

それは、昨日のことだった。

氷麗から電話が来る

IS学園に転入する事になった

なので、準備をするので買い物に付き合っしてほしい

といった流れがあり、現在の状況になった。

「早く行きましょう、鯉半さま！」

俺の手を引きながら、早く行こうと急かす氷麗。

なんか、後ろの方から嫌な視線を感じるし……

なんか、前にもこんなことがあったような気がする。

なによ、あの女！

鯉半の手を握っちゃって……！

「「「……………」」」

あたしの隣に居る篝やセシリア、そして千冬さんも明らかに怒っていると言った雰囲気を出している。

てか、千冬さんまで来るなんて……

「あ、いたいた。みんな」

嫉妬の視線を鯉半に送っていると、一夏が合流した。

んっ？

なんで蘭も一緒に居るの？

「お久しぶりです。鈴さん」

「なんであんたがここに居るのよ」

「鯉半さんに会えると聞いて、着いてきました」

ま、まさか……

鯉半の奴……また要らん所でフラグ立てたな！！

千冬さんたちもそれに気が付いたのか、蘭を睨んでいる。

そんなことをしている内に、鯉半たちが移動を始めた。

「移動し始めたぞ。追っぞ」

「「「「「はい「「「「」

うん、やっぱり千冬さんには逆らえないな……

Side Out

「で、何を買った？」

「そうですね。とりあえず、マフラーとか……」

「いや、季節じゃ……ああ、お前には必要だったな」

「はい！」

こいつは年がら年中マフラーしてるんだっ たな……

てか、この時期売ってるのか？？

「あ、あそこがいいマフラーが」

あるのかよー！

そこには、『マフラー専門店 雪女』と書かれていた。

何だろう……このピンポイントな名前は……

「さあ、行きましょうー！」

そのまま手を引かれて入店する事となった。

店の中は見事にマフラーだけだった。

氷麗は、キラキラした笑顔で店の中を見てまわっている。

この季節には暑苦しいな。

「鯉半さま、ここすごいですね！」

「……ああ。そうだな」

主に、暑苦しさがな。

「ああ、どれもいいマフラーです」

どれにしようか迷っている氷麗を余所に、店の中を見てまわっていた。

それにしても、ホントにマフラーしかないんだな……

冬にはいいと思うが、まだ夏にもなっていないんだが……

「鯉半さま！これどう思いますか？」

氷麗が手にしていたのは、雪の結晶が彩られたマフラーだった。

「氷麗によく似合う柄じゃねえか」

「そ、そうですね／＼」

嬉しそうにマフラーを抱きしめる氷麗。

「これ買いますー！ー」

そう言って、レジに向かって行くうとした。

「氷麗、買ってやるよ」

「そ、そそそそんな！鯉半さまの手を煩わせなくても！ー」

「いって。それくらいさせてくれ。いつもお前には世話になってたからな」

「あ、う、あ……」

顔を赤くして、しどろもどろし始める氷麗。

「お、お願いします……」

「おっ」

氷麗からマフラーを受け取り、レジへと向かった。

ふむ、ついでに尾行して居るやつらにも買ってやるか。

そのまま、それぞれに合いそうなマフラーを選んで買った。

なんか最近、金が出て行くことしかしてないような気がする。

「ホントにありがとうございます。鯉半さま」

「いいって」

氷麗が、マフラーの入った袋を抱えながら嬉しそうに言ってきた。

「それでも嬉しいんです。鯉半さまからのプレゼントっていう事が」

「そうかい」

そう言って、氷麗と一緒に商店街を歩いていた。

「なんだかこうやって鯉半さまと一緒に居るのが久しぶりに感じます」

「だろうな。二ヶ月ぶりだからな」

「はい……でも、これからはいつでも一緒に居られます」

「……なあ氷麗。やっぱりお前が転入してきたのって……」

氷麗の転入を聞いて最初に思ったこと。

それを聞こうとしたら

「はい。たしかに、今回の転入は鯉半さまの護衛が目的です。でも、私が望んだことでもあります」

「氷麗……」

「私は、あなたと盃を交わした時からあなたのモノです。だから……」

「ああ、これからは頼りにするぜ。氷麗……」

「はいつー!」

氷麗は今日一番の笑顔で答えた。

頼りにしてるよ、俺の側近。

おまけ

S i d e 追跡者

「「「「「」……………」「「「「」

離れた所で二人のことを見ている筈たちからは嫉妬の視線が送られていた。

知らない女と想いの人が楽しそうに歩いていたらそうになってしまうのは当り前だろう。

「なんなんだあいつは」

「鯉半さんと楽しそうにして……………」

「鯉半も鯉半よ。あんなに楽しそうにして」

「鯉半……………今日帰ったら」

「（鯉半の奴……………それにしても、あの鯉半と一緒に居る女……………どこかで見たような？）」「

「鯉半さん……………」

それぞれ気持ちが駄々漏れだった。

「何やってんだ、お前ら？」

すると、筈たちの後ろから声が聞こえた。

そこには、先程まで前に居たはずの鯉半と氷麗が居た。

「くくくくくくなっ!？」
「くくくく」

慌てて、前を見たら誰もいなかった。

「はあ、なにやってんだか」

その後、箒たちのいい訳を聞いていた鯉半。

そのついでに、先程買ったマフラーを全員に渡していたが、季節外れのせいか全員が顔を引き攣っていた。

その際、先程まで機嫌が良かった氷麗は若干機嫌が悪くなっていたりした。

ちなみに、蘭は鯉半と話すことができて、連絡先を交換していた。

来訪者T / 束の間の休息（後書き）

お久しぶりです。

今回は、二巻の導入＋リクエストで行ってみました。

次回からはついに二巻です。

シャルとラウラが出てきます。

そして、みんなが楽しみにしていたあのお方も……

楽しみだな……

遅くなりましたが、俊さんこんな感じでよかったですでしょうか？

新たな出会いと転校生と再会（前書き）

注意！！

この先、キャラ崩壊があります。

こんなのあの方じゃない！

という人は戻ることをお勧めします。

新たな出会いと転校生と再会

「ねえ、聞いた？」

「聞いた聞いた！」

「え、何の話？」

「だから、あの神裂くんの話よ」

「いい話？悪い話？」

「最上級にいい話」

「聞く！」

「まあまあ落ち着きなさい。いい？絶対これは女子にしか教えちゃダメよ？女の子だけの話なんだから。実はね、今月の学年別トーナメントで……」

時間は夕飯時。

俺は、鈴と一緒に食堂に来ていた。

もう慣れてきたことだが、食堂は思春期真っ只中の女子で埋め尽くされていた。

その食堂の一角に、十数名でスクラムを組んでいる一団を発見した。

「またなんか良からぬ事企んでるんじゃないかねえのあれ」

「さ、さあ」

鈴に聞いてみたが、鈴もわからないようなので、気にしないことにした。

「離れた所で食べるか」

「う、うん」

「……で、なんであんたまで居るのよ、一夏！」

席を見つけ、鈴と二人で夕食を食べていたのだが

「別にいいだろ」

しれっとした顔でいつの間にか俺の隣に座っていた一夏。

「っ！一夏、やっぱりあんたとは決着付けなきゃいけないみたいね」

「へえ、私もそう思ったところだよ。鈴」

二人の間に火花が散っている。

関わらない方が身のためだな。

こういうことに関わってロクな目にあつたことがない……

気付かれないようにさっさと食堂を出ようとしたのだが、

「あ

「あ

筈に出くわした。

気まずい雰囲気 flowed。

先月のあの一件以来、何かと俺を避けるようになった筈。

「よう、今から夕食か？」

「ああ

この様に、俺が話しかけても生返事しかして来てくれない。

「そ、それではな！」

逃げるようにさっさと食堂の中へ消えて行った筈。

どうしたものか。

クラスに入ってきた三人を見て、クラス中が静まり返った。

三人のうちの一人の氷麗は俺を見て笑顔で手を振ってきた。

一夏と箒は氷麗の顔を見て驚いた顔をしている。

普段だったら、このような行動だけでもクラスからは色々な声がかかるはずだが、今回はそんなことは起きなかった。

なぜなら、それ以上の衝撃があるから……

なんたって、残りの二人のうちの一人が……男だったのだから。

「シャルル・デュノアです。フランスから来ました。この国では不慣れなことも多いかと思いますが、みなさんよろしくお願いします」
転校生のうちの一人であるシャルル・デュノアがにこやかな顔をしながらそう言った。

「お、男？」

「はい。こちらに僕と同じ境遇の方がいると聞いて本国より転入を……」

俺の方を見ながらそう言ってきたデュノア。

「きゃ……」

「はい？」

「きゃあああああああ！！」

女子の歓喜の叫びが木霊した。

「男子！二人目の男子！」

「しかもうちのクラス！」

「美形！守ってあげたくなる系の！」

「地球に生まれてよかった~~~~~！」

今日も元気な一組の女子。

いつものことながら、この元気さはなれないな……

「あー、騒ぐな静かにしろ」

「み、皆さんお静かに。まだ自己紹介が終わってませんから」

千冬と山田先生が女子たちに注意をしている。

女子たちは、注意を受けて、残りの自己紹介を聞くことにした。

現金なものだな。

本家に居たころ会ったあのウソツキと同じタイプだ。

「……………挨拶をしろ、ラウラ」

「はい、教官」

千冬にそう言われていきなり佇まいを直し始めた転校生。

「ここではそう呼ぶな。もう私は教官ではないし、ここではお前も一般生徒だ。私のことは織斑先生と呼べ」

「了解しました」

千冬言葉に従う転校生。

教官か……………

たしか、ドイツで一時期軍隊教官をしていたんだっけ。

「ラウラ・ボーデヴィツヒだ」

「……………」

名前を言ったまま、口を閉ざす転校生……………ボーデヴィツヒ。

「あ、あの、以上……………ですか？」

「以上だ」

山田先生が沈黙に耐えかねて聞いたが、転校生はピシヤリと返答を

した。

「！貴様が……」

ボーデヴィツヒが一夏の方へと歩いて行った。

そして、腕を振り上げて

パシッ

振り下ろした手を二人の間に入った俺が止めた。

「てめえはいきなりなにをしてるんだ」

かなりドスを利かせた声でボーデヴィツヒに聞く。

「邪魔をするな。私はその女を認めない。その女があの人のお妹であるなど……貴様、その髪の色……」

ボーデヴィツヒは俺の髪を見て何かをつぶやきだした。

「そうか貴様が……私は貴様も認めない」

そう言って、俺の手を払い除けてさっさと空いている席へと行ってしまった。

何なんだ……

「大丈夫だったか、一夏？」

「ああ、鯉半が守ってくれたから……」

顔を赤くしながら嬉しそうに言う一夏。

なんて、若干ピンク色の空間を醸し出していると

「あー……ゴホンゴホン！ではHRを終わる。各人はすぐに着替えて第二グラウンドに集合。今日は二組と合同でIS模擬戦闘を行う。解散！」

千冬によって遮断された。

「おい神裂。デュノアの面倒を見てやれ」

「ああ、わかっている」

千冬に言われ、デュノアの所へと歩み寄った。

「君が神裂くん？初めまして。僕は……」

「挨拶は後だ。早く行くぞ」

挨拶をしてくるデュノアの手を取りとつと教室を出た。

「ど、どうしたの？」

「あん？それは……」

俺が急いでいる理由を言おうとした時

「ああっ！転校生発見！」

「しかも神裂くんと一緒！」

「チツ、もう来やがった」

このままでは、授業に遅れる。

そうだったら、千冬になにされるかわからんからな……

「な、なに？何でみんな騒いでるの？」

意味がわからないと言った顔で聞いてくるデュノア。

「あん？そりやこの学園に居る二人だけの男子が珍しいからだろ」

「あっ！……ああ、うん。そうだね」

歯切れの悪い返事をしてくるデュノア。

なんだ、この違和感は……？

亜麻乃と初めて会った時と似たような……

「いたっ！こっちよ！」

「きゃあああああ！あの二人手繋いでる！！」

「なにあの二人！！超絵になる！！！」

違和感について考えていると女子たちに見つかってしまった。

最後の奴、千冬に報告だな。

「面倒くせえ。ちょっと我慢してろよ、デュノア」

「えっ？ええっ！？」

俺は、デュノアを横抱き……所謂お姫様抱っこをして、窓から飛び降りた。

「きゃああああああ！！」

女みたいな声をあげて抱きついてくるデュノア。

そのまま第二アリーナの更衣室へと走った。

「大丈夫か？」

「う、うん……」

なんか、疲れたような顔をしながらいまだ抱き付いてきているデュノア。

「デュノア」

「ど、どうしたの？」

「そろそろ下したいんだが……」

「あつー！」「ごめんねー!!」

そう言っつてデュノアは飛びのくように離れた。

「……気にするな。俺は神裂鯉半。鯉半でいい。」

「うん。よろしくね鯉半。僕はシャルル・デュノア。シャルルでいいよ」

デュノア……シャルルは、そう言いながら手を出してきた。

「ああ、よろしく」

俺はその手を取っつてそう言っつた。

そして、更衣室に入り着替えを始めた。

「どっつしたシャルル？」

制服の上着を脱いで、Yシャツになったところで、シャルルの視線に気が付いた。

「な、なんでもないよー!!」

顔を赤くして、視線を外すシャルル。

……まさかな。

その後、着替え終わり更衣室から出た時、覚えのある気配を感じた。

「……シャルル、先に行っていてくれないか？」

「どうかしたの、鯉半？」

「少し用事がな……」

「じ、じゃあ先に行ってるね」

シャルルを先に行かせて俺は、気配の方に振り向かずにこう言った。

「居るんだろう？乙女……」

「ほう。やはり気付いておったか……さすが妾の夫となるものだな
鯉半」

気配のする方向からあらわれたのは、ISスーツを身に纏った本家に居たころに出会った幼馴染。

名を山吹乙女。

俺の許嫁だ……

「なんでお前が……」

「それを貴様が言うのか？妾を放っておいて、女どもとイチヤイチヤしていたそうじゃないか……」

そう言いながら近づいてくる乙女。

ヤバいな……このままだと……

「さ、寂しかったんだぞ!!」

キュルンっと言う擬音が聞こえ、乙女は目に涙を浮かべながら抱きついてきた。

はあ、俺千冬に殺されたかも……

こうして、乙女を慰めなければならなくなった。

授業開始まで後わずか……

新たな出会いと転校生と再会（後書き）

お久しぶりです!!

更新遅れてすみません!!

私生活がとても忙しくて全然手がつけられませんでした。
なるべく早くUPするように努力します。

ついに今回から、原作第二巻に入りました。

シャルやラウラ以外にも来た転校生たち……

その存在がいったい何をもたらすのか……

そして、鯉半の修羅場は!!

追記

氷麗の鯉半の呼び方を修正。

俊さまご指摘ありがとうございます。

乙女と嫉妬とお姫様抱っこ（前書き）

注意！？

今回も一部キャラクターが壊れている可能性があります。
それでもいいという方のみご覧ください。

生徒たちの悲鳴が上がった。

「何事だ！……………?!?!?!」

私は、生徒たちの視線が向いている方を見てみて絶句した。

そこには、知らない女を横抱き（お姫様抱っこ）した鯉半がいた……

フッフツ……………鯉半……………カクゴハデキテイルンダロウナ……………

Side Out

「聞いておるのか鯉半！」

「はいはい、聞いてるよ」

あの後、なんとか乙女を慰め、乙女の要望でお姫様抱っこをしながら第二グラウンドに向かっているんだが……

如何せんこの体勢だと俺の命がない……

「なあ、この体勢じゃなきゃダメなのか？」

そして、千冬たちが俺を殺しに来るのも……

「……………り〜は〜ん〜(さん)(さま)!!……………」

「お前ら！俺を殺す気か！！」

「……………死ね〜!!……………」

千冬、箒、一夏が刀と雪片で斬りかかり、セシリアがスターライトmk?、鈴が龍砲を放ち、氷麗が薙刀“氷結牙”で斬りかかってきた。

って、マジか！！

ガシンッ

「貴様ら……なにをしている」

しかし、その攻撃は腕の中にいる乙女のISである“羽衣狐”の九本の尻尾状のギミックによって全員の攻撃を受け止められていた。

しかも、乙女の目のハイライトが消えている。

その後、ヤンデレと化した乙女と千冬たちが一触即発の雰囲気を出したが、俺が身を呈してその場を収めた。

いや、俺が原因なんだけどね……

「ゴホンッ。では、本日から格闘及び射撃を含む実戦訓練を開始する」

『はい!』

さっきまでの事をなかったかのようにする様に咳払いをして授業を進める千冬。

「……鯉半のバカ者……大体、私がいるだろう……」

「なんで、フラグしか立てないんだ……私じゃ不満なのか……」

「鯉半さんはいつもいつもいつも!」

「……なによ、鯉半の奴……でも、あたしは鯉半と体も心も一つになっただし……」

「もう、鯉半さまも乙女さまもなにをしているんですか……!」

ぶつぶつと何かを言っている俺を殺しにかかった者たち。

非はお前らにあるんだぞ。

そして、もう一人の当事者である乙女は俺の隣で悠々としている。

「今日は戦闘を実演してもらおう。そうだな……鳳!オルコット!準備をしろ」

「なっ！なぜわたくしですのー！！」

「なんであたしまでー！！」

さつきからぶつくさ文句言ってるからだろ。

「専用機持ちはすぐにはじめられるからだ。いいから前に出る」

「なんでわたくしが……」

「鯉半が悪いのに……」

不機嫌だった表情をさらに不機嫌にしながら前へ出る二人。

「お前ら少しはやる気を出せ。……癩だが、アイツにいいところを見せられるぞ？」

なんだか千冬が二人に近づき何かを言ったみたいだ。

生憎、ここからでは何を言っているのか聞こえないが……

「やはりここはイギリス代表候補生であるこのわたくし、セシリア・オルコットの出番ですわね！」

「まあ、実力の違いを見せるいい機会よね！専用機持ちの！」

いきなりやる気を出し始める二人。

いや、ホントに何を言っただんだ千冬は……

「それで、相手はどちらに？わたくしは鈴さんとの勝負でもかまいませんが」

「ふふん。それはこっちのセリフ。返り討ちにしてあげる」

なんだか威嚇しあっている二人。

「慌てるなバカども。対戦相手は……」

「……いて……さうい！」

あん？なんか上から声が……？

「ああああっ！どいてくださいー！！」

上から、ISを纏った山田先生が……って！

「ひ、百鬼夜行ー！！」

ギリギリで、百鬼夜行の展開が間に合い山田先生を受け止めることができた。

「大丈夫ですか、山田先生？」

「か、神裂くん……」

何で顔を赤くするんだ……？

ああ、この姿勢（お姫様抱っこ）のせいか。

「その、困ります……私たちは教師と生徒で……あ、でも、織斑先生も神裂くんにアプローチをしているし……それに、神裂くんなら……」

なんか妙なことを言いながらイヤンイヤンと顔を横に振って悶えている。

「……!？」

何かを感じ、首を逸らすと先程まで首があつたところをレーザー光が貫いた。

「ホホホホ……残念です。外してしまいましたわ……」

と、顔は笑っているが、目が明らかに怒っているセシリア（大逆鱗バージョン）が俺を狙っていた。

「……………」

続けざまに背後から、何かが連結するような音がした。

いや、この音は……鈴の武装“双天牙月”が連結する音……

ゆっくりと鈴の方を見ると、双天牙月を振りかぶって投げて……つておい!？

山田先生を抱えているので祢々切丸を展開する事が出来なかった。

これ死んだかも……

「はっ！」

あれ？

短く二発、銃声が聞こえたと思ったら、双天牙月は俺からそれで行った。

銃声がした方、俺の腕の中を見ると両手で五十一口径アサルトライフル“レッドバレット”を構えた山田先生がいた。

「……………」

いつもと雰囲気全然違う山田先生に俺だけではなく攻撃を仕掛けてきたセシリアや鈴も驚いていた。

「山田先生はああ見えても元代表候補生だからな。今くらいの射撃は造作もない。（鯉半、いつまでその格好で居るつもりだ？）」

「む、昔のことですよ……………それに候補生止まりだったし……………あ、神裂くんそろそろ下してくれませんか？（お、織斑先生の目が怖いですし…………）」

「あ、ああ」

今だ、驚きが抜け切れていないが山田先生に言われた通り山田先生を下した。

「さて、小娘どもいつまで惚けている。さっさと始めるぞ」

「え？あの、二対一で……？」

「いや、さすがにそれは……」

「安心しろ。今のお前たちならすぐに負ける」

結果から言うとセシリアと鈴は山田先生にフルボッコにされた。

「くっ、うう……まさかこのわたくしが」

「なんで、簡単に動きが読まれんのよ……」

見るからに落ち込んでいる二人。

代表候補生としてのプライドがズタズタにされたんだろう。

「さて、これで諸君にもIS学園教員の実力は理解できただろう。以後は敬意を持って接するように」

千冬がぱんぱんと手を叩いて全員の意識を切り替える。

「専用機持ちは神裂、織斑、オルコット、デュノア、ボーデヴィツヒ、凰、雪原、山吹か……では、五人グループになって実習を行う。各グループリーダーは専用機持ちがやること。いいな？では分かれる」

千冬が言い終わった瞬間、俺とシャルルに一気に二クラス分の女子が詰め寄って来た。

「神裂くん、一緒にがんばろう！」

「わかんないところ教えて〜」

「デュノアくんの操縦技術を見たいなあ」

「ね、ね、私もいいよね？同じグループに入れて！」

思った通り大変なことになった。

俺は、あまり気にはいなかったが、シャルルはどうしたらいいのかといった顔で困っていた。

「このバカどもが……出席番号順に一人ずつ各グループに入れ！順番はさっき言った通りだ。次にもたつくようなら今日はISを背負ってグラウンド百周させるからな」

千冬の言葉によって集まっていた女子たちはわらわらと散らばった。
んで。

「やった〜。神裂くんと同じ班だ！」

「うっ……セシリアかあ……さっきボロ負けだったし……」

「鳳さん、よろしくね。あとで神裂くんのお話聞かせてよっ」

「デュノアくん！わかんないことがあつたら聞いてね！」

「雪原さん、神裂くんとの関係知りたいな」

「……………」

乙女とボーデヴィツヒの班では一切の言葉がない。

乙女の話しかけるなというオーラとボーデヴィツヒの人とのコミュニケーションを拒むオーラで……

可哀そうに……

「ええと、いいですかーみなさん。これから訓練機を一班一体取りに来てください。数は『打鉄』が五体、『リヴァイブ』が三体です。好きな方を班で決めてくださいね」

うーん……俺は何でもいいんだがな……

「神裂くん、準備できたよ」

「ん、じゃあ、出生番号順でやるぞ。最初は……」

「はい！出席番号一番！相川清香！」

「よろしくな」

「あ、はい！」

順調に一人目を終了させて二人目に入ろうとしたのだが、しゃがませた状態で解除させるのを忘れてしまっていた。

どうするか……

「どうしました？神裂くん？」

「ISしゃがませるの忘れて……」

「あ〜しょうがないですね……神裂くんが運んであげてください」

……今日はなんだ、厄日か……

その後、他の班からの嫉妬の視線を浴びながらISに乗せるのを手伝っていった。

てか、なんでみんなしゃがませないんだよ……

「次は……」

「私だ」

次は、明らかに私不機嫌ですよといった雰囲気を感じ出している筈だった。

「ほら、こっちに来い。運ぶから」

「う、うむ……きゃ！」

近づいてきた筈を抱えてやると筈らしくない声をあげた。

ドカッ

「なにすんだよ……」

「いま、変なこと考えていただろう」

どうやら箒はサトリでも開いたようだ。

「……ちゃんとつかまってるよ。落ちてもしらねえぞ」

「わ、わかっている！（こ、これは、いいものだな……）」

箒が、落ちないようにと俺の首に抱きついてきた。

いや、そこまでしなくてもいいんだけど……

「箒」

「な、なんだ……？」

「もう、離れてもいいぞ」

「えっ！あ、そ、そうだな……」

残念そうな顔をしながら打鉄に移る箒。

「り、鯉半」

「なんだ？」

「そ、その、今日の昼は暇か？」

「ああ、特に予定はないぞ」

「な、なら、一緒に昼食を取らないか！」

授業中なのによく誘ってこれるな。

まあいいけど。

「いいぞ」

「そ、そうか！約束だからな！」

そう言って、“立ったままの姿勢”で打鉄から降りる筈。

だから、何でみんな立ったまま降りるんだよ！！

乙女と嫉妬とお姫様抱っこ（後書き）

お久しぶりです！

今回も更新遅くてすみませんorz
がんばったんですけどね……

今回は、お姫様抱っこ这回ですね。

いっぱいお姫様抱っこしています。

今回はどうなるかな……

ああ、早くシャルとの濃い絡みを書きたい……

お昼と弁当とシャルル

「……どういことだ」

「その、なんていうか……すまん」

現在、箒との約束であった昼食を取るために屋上へと俺たちは来ている。

普段ならば、女子たちの憩いの場として賑わっている屋上だが、今日はシャルルを一目見ようと食堂に向かったみたいだったのでガラリとしている。

「いや、鯉半のせいではない……」

そう言った箒は、俺の横へと視線を移した。

そこには、何食わぬ顔でいる一夏、セシリア、鈴、そしてすまなそうな顔をしているシャルルがいる。

「天気もいい事だし屋上で食べようと思ってね。それにシャルルは転校してきたばかりだし右も左もわからないと思ったから誘ったの……そしたら、たまたま箒と鯉半がいたから一緒に食べようと思ってね（鯉半と二人きりで食事なんてさせると思った？）」

箒の視線を感じた一夏が何でもなしのように言った。

「うっ……（せっかく、鯉半と二人きりで食べれると思ったのに……）」

なんかとても悔しそうにしている筈。

その手の中には、筈にしてはかわいらしい包みに包まれた弁当箱が握られていた。

ちなみに、一夏の手の中にもこれまたかわいらしい包みに包まれた弁当箱があった。

ガチャ

「あっ！やっぱりいました！！」

「ふむ。やはり妾の言った通りだろう」

そんな空気の中、新たなる乱入者……氷麗と乙女の登場。

そして、輪の中に加わってきた。

筈、orz状態……ホントにすまん。

「はい鯉半。あんたの分」

「……どうしたんだ、鈴。お前が俺に料理を作ってくるなんて……」

「なによ。前にうまくなったかって聞いてきたのあんたじゃない」

「ああ……そうだったな。まあ、ありがたく頂くよ」

ありがたく鈴が作ってきた酢豚の入ったタップパを受け取った。

「コホンコホン。鯉半さん、わたくしも今朝たまたま早く起きて、たまたまこの様なものを用意してみましたの。よろしければおひとつどうぞ」

「あつ、私も作ってきたんですよ！」

そう言ってセシリアはバスケットを、氷麗は弁当箱を出してきた。

「あ、ああ……あとでもらう」

「?どうかしまして?」

「どうしたんですか鯉半さま?」

二人して不思議そうに首をかしげるな。

この二人、いや、氷麗に関しては料理はうまい。

だが、セシリアは……料理が全くできない。

見た目は普通においしそうなんだが、味が破滅的にマズイ。

正直、味見をしると言ってやりたい。

氷麗は料理の味はおいしい。

だがしかし、こいつの作った料理はなんでか氷漬けにされている。

あれか、料理の時にISを起動させているのか?

「ええと、本当に僕が同席してもよかったのかな？」

頭を抱えている俺の隣に居るシャルルがそう言った。

「いや、大丈夫だ。(むしろ居てくれないと、こいつらの暴走が止まらない)」

遠い目をしながら言うと、シャルルは「ハハハ」と苦笑気味に笑った。

「くっ、鯉半！お前の分の弁当だ！ありがたく食べる！」

先ほどまでorz状態だった筈が復活して俺に弁当箱を渡してきた。

「あっ、鯉半！私のも！」

便乗するように一夏も渡してきた。

「あ、ああ………」

俺は、二人の分もありがたくもらったのだが、五人分って……

そういえば、乙女はどうしたんだ？

「いいんじゃない、いいんじゃない………妾はちょっと料理が苦手なだけなんじゃ………鯉半は妾が作った時は、おいしいって言ってくれるもん………」

なんか、隅でイジけていた。

ああ、そういえば乙女って家事全般苦手だったっけ？

「ほら乙女。お前にやるよ」

俺は、自分用に持ってきていたものを乙女に渡した。

『……………!!』

俺の行動にシャルルを除いた五人はかなり驚いていた。

「り、りはん……………ありがとう!!」

とてもうれしそうに笑顔で抱きついてきた。

『ブチッ!!』

あ、また不幸な音が聞こえた……………

「……………疲れた」

「ハハハ……………大丈夫？」

現在、夕食を終えて部屋に俺とシャルルは居た。

え？飛びすぎだつて？

あの後はおど……お願いされて、全員にあぐんをしてやった。

「それにしても、鯉半っていつもあんなに女の子を侍らせてるの？」

「侍らせていない。勝手にくるんだ」

「もっとたちが悪いよ……」

シャルルが何かを言っているが生憎聞こえなかった。

「はあ……シャワー浴びるなら浴びていいからな……」

「あ、うん……鯉半は？」

「明日の朝入る。それに」

“男の俺がいたら気まずいだろ”

「えっ……ど、どついついこと……」

どつして？といった感じの顔で俺を見てくるシャルル。

「これでも、女と男の違いくらいわかるぞ」

「……」

シャルルの顔に浮かぶのは恐怖。

俺は、そんなシャルルの頭を撫でてやりながら

「お前が何のためにそんな恰好でいるのかは知らない」

「……………」

「まあ、話したくなったら話してくれればいいからな」

撫でてた頭をポンポンと叩いてやったら

「うつ、うつ……………」

泣き始めてしまった。

「ちよっ、なんで泣くんだよ」

「うつ、ごめんね……………こんな風に優しくされたのが初めてで……………」

そのまま泣き続けてしまっているシャルルを俺は優しく撫で続けてやっただ。

「ごめんね鯉半……………見つとも無い所見せて」

「ちよ」

しばらくして落ち着いたシャルルが顔を赤くしながら謝ってきた。

かわいいなこの野郎……

シャルルの仕草が俺の理性を削って行く中

「聞いてくれるかな鯉半？」

「いいのか？」

「うん。鯉半には聞いてほしんだ……」

そして、シャルルが語り始める。

シャルルの話を聞き終わり、俺は顔を伏せ静かに怒っていた。

「り、鯉半？」

心配そうに顔を覗き込んでくるシャルル。

「……ざけんな」

「えっ？」

「ぶざけんな!?!」

俺は思わず叫んでしまった。

親が、親が子供を……！

「テメエの都合で子供を作って、今度は道具扱いだと……！」

許せなかった。

親が子供を道具扱いすることが。

子供を子供としてみないことが……

「シャルル、さっきお前は選ぶ権利がないって言ったな」

「う、うん……」

「なら、俺のものになれ！」

「えっ、ええ……！ちよっ、ええ……！」

シャルルは顔を真っ赤にしてうるたえる。

「俺が守ってやる。お前は一人じゃない。俺が、俺と一緒に居てやる……だから」

「り、鯉半……」

「じじいさん」

涙を流しながら抱きついてくるシャルル。

そのまましばらくシャルルは抱きついていた。

抱きつきながら、小さく

「ありがとう鯉半……」

そう言ったように聞こえた。

お昼と弁当とシャルル（後書き）

お久しぶりです！

2週間かかってしまいました……

実習がね、あつてね、準備がね、大変なんだよ……

そして、今回は難産でした。

しかも、支離滅裂してて……

でも、展開上必要なんだよね。

今月中にもう一本あげたいな……

突発的未来編ノとある未来の来訪者（前書き）

更新遅くなってごめんなさいm（| | m
実習中にコツコツ書いていたリハビリ作品です。
短いですが、ご覧ください。

突発的未来編 / とある未来の来訪者

その日は、いつもと同じように部屋で寝ていた。

だが、この状況はなんだ……

「むにゅ〜」

知らない子供が俺の腹の上で寝ていた。

いつものようにラウラがまた侵入していたのかと思ったんだが……

シルバーブロンドの五歳くらいの女の子だった。

うん。どうしようか……

「う、うん……」

どうしようか考えていると、女の子が目を覚ました。

「……ん、おはよう“パパ”」

今日は、俺の命日になるかな……

今回は、私が語りみたいだな。

私は、同室の箒と一緒に食堂に来て朝食を取っていた。

今日は、休日ともあって私たちは遅くに食堂に来たため、人がまばらだった。

「あ、一夏に箒。おはよう」

「おはようございます。一夏さん、箒さん」

「ん、おはよう。一夏、箒」

そこに、お盆を持った鈴、セシリア、ラウラがあいさつをしてきた。

「おはよう。鈴、セシリア、ラウラ」

「おはよう。お前たちもこれから朝食か？」

私と箒もおはようと返し、鈴たちが目の前の席に座った。

「あれ、シャルロットは？」

「まだ準備に手間取ってたんで先に来た」

珍しいこともあるんだな。

なんて考えていると

「…………おはよう」

そこに、私の想い人である鯉半の声が聞こえた。

「おはよう、りは…………ん」

いつもの様にあいさつをしようと鯉半の方を振り返ると

「…………」

見たこともない幼女が鯉半にぶら下がりがらこちらをジーと見ていた。

啞然としている私たちを余所に鯉半は席に着いた。

ぶら下がっていた幼女は鯉半の膝の上に移動していた。

「お腹減ったよ。パパ」

……………ブチッ

「鯉半、ちよつとOHANASHIしようか」

「鯉半、そこに直れ。なに、すぐにその首を落としてやる」

「鯉半さん。節操のない人には教育が必要だと思えますの」

「ちよつと鯉半……………キリキリ吐いてもらいましょうか」

「嫁よ。私というものがありながらどこの馬の骨とも知れない女と子供を作ったのか」

上から、私、箒、セシリア、鈴、ラウラといった順でISを展開して鯉半に狙いを定めた。

うん。鯉半にはOSHIOKIが必要だね。

「待て、お前ら。俺の話を聞け!!」

鯉半が必死になって私たちを止めようとするがそんなのに聞く耳は持たない。

と、そこに

「ごめん、遅れ……何この状況？」

遅れていたシャルロットがやってきた。

よし。シャルロットも仲間に取り入れよう。

「シャル」あつ！ママ〜!!」「っえ？」

シャルロットに声をかけようとした時、鯉半の膝の上に居た少女が勢いよくシャルロットに抱きついていった。

「」「」「はあああああああ!?!」「」「」「」

Side Out

「それで鯉半。これはどういう事だ」

俺は騒ぎを聞きつけてやってきた千冬によってボコボコにされ会議室で正座をさせられている。

もう一人の当事者であるシャルは……

「もう、シャーリーはかわいいなあ」

「むぐっ、苦しいよママ〜」

絶賛、娘(?)のシャーリー・D・カンザキと戯れていた。

「で、あの娘はなんだ？デュノアの事を母と呼んでいるようだ？」

「いや……俺にもよくわからん」

「……どつちら嘘は言っていないようだな」

そう言いながら、千冬はシャーリーの方を見て近づいて行った。

「少し聞いてもいいか？」

千冬がシャーリーに話しかけるとシャーリーが千冬の方を向き

「あつ、真冬お姉ちゃん!!」

そう言いながら、シャルから離れて千冬似の人物、真冬に抱きついたシャーリー。

「はぁ……シャーリー、いくらシャルロットさんが臨月に入ったからって一人で“あれ”の機械を使うのは感心しないぞ」

「だって……」

真冬の言葉にシュンとしてしまうシャーリー。

「まったく、心配してたのは私だけではないんだぞ」

真冬がそう言った瞬間、真冬が入ってきたドアからゾロゾロと人影が入ってきた。

その誰もが、この場に居る全員や居ない者の面影を持った12人の子供たちだった。

突発的未来編 / とある未来の来訪者 (後書き)

お久しぶりです。

今回は、リハビリも兼ねたネタ物の回です。

鯉半の子供たちの名前については、母親の名前の一部を入れた感じにしていきたいです。

ちなみに続きます。

朝と嫉妬と深き闇（前書き）

遅くなつてすみません。

番外編より本編の方が先にできてしまいました。
楽しみにしていた方々すみません……
短いですがどうぞ。

朝と嫉妬と深き闇

Side シャルル

「……んっ」

朝、僕は窓から差し込む日の光で目が覚めた。

いまだボーっとする頭で昨日のことを思い出していた。

昨日は鯉半に僕の正体がばれて、そして……

ボンツ！

あわわっ……！どうしよう……！

男の人にあんな風に抱きしめられて……

しかも、『俺と一緒に居てやる』だなんて言われて……

やばっ、顔が熱くなってきた。

そのおかげで、段々と意識が覚醒して行って、今の状況を把握してしまった。

「スースー」

「えっ！」

S i d e 鈴

あたしは今、非常に不機嫌だ。

あたしだけではなく一夏、箒、セシリア、氷麗も絶賛不機嫌中である。

その理由は……

「ねえ、鯉半」

「どうしたシャルル？」

なんで、男同士であんなに引っついてんのよ！！

他の女子たちからは、鯉半×シャルルとか言う声が聞こえてくる。

中からは、やっぱり神裂君が攻めね！という声も聞こえる。

「なあ……」

「なんだ」

「なんですの」

「なに」

一夏があたしたちに声をかけてきた。

「何なんだあれ？」

「「「知らん（ない）（りませんわ）」「」」

あたしたちが知るわけないじゃない……

「まさか……私たちのアプローチに気付かないのは鯉半が女に興味がないからなんじゃ……」

いやいや、なに言ってるのよー夏！

それに、鯉半はちゃんとあたしたちの気持ちに気付いてるわよ。

だって、じゃなかったらあんな……（この前のキス未遂を思い出しています）

……だっ、ダメよ鯉半！

あたしがいるのに……！

ビシッ

「痛った……！！なにすんのよ……！！」

頭を押さえながら後ろを見ると手刀を振り下ろしているー夏がいた。

「お前が変なこと考えているからだ」

「な、何言ってるのよ！あ、あたしがそんな……」

う、なんでわかるのよ……

「顔に出てるぞ」

ウソっ！

鈴たちがなんかこっちを見ながらなんか話しているようだが生憎聞こえないのでわからない。

「鯉半、どうしたの？」

「あ、いや……なんでもない」

鈴たちの方に意識を向けていたら、シャルルが俺を見上げながら心配そうに聞いてきた。

昨日の朝の事があってから、なんだかふっ切れたのか俺と行動を一緒にするようになったシャルル。

しかも、かなり無防備に……

このまま、ずっと同じ部屋だと……

筭の時もそうだったけど、理性が持たん。

「？」

俺の気も知らないシャルルは、かわいく首をかしげていた。

持てよ、俺の理性……

Side ラウラ

暗い闇に閉ざされた部屋の中、私は一人、存在していた。

（織斑一夏……教官に汚点を残させた張本人）

空っぽだった私のすべてとなった織斑^{ヒト}千冬に汚点を残させた女。

（そして、神裂鯉半……）

あの男の存在を私は認めない。

教官にあのような顔をさせたあの男を……

（貴様ら二人はどのような手段を取ってでも排除する！！）

暗い闘志に火を付け私の意識は闇の中に溶けて行った。

S i d e O u t

S i d e ? ? ?

「へえ、なかなか上質な闇を持っているじゃないか」

深夜、誰もが寝静まった丑の刻。

暗い闇の中、それらは存在していた。

「しかも、都合良くあの男のことを恨んでくれている。これは利用しない手はないネエ」

「そうですね、師匠」

「だから、お前さんに師匠呼ばわりされる筋合いはないよ」

影は、手に持つセンスを畳みながら

「あたしたちは全員が対等だ。一人でも欠けたら存在できない」

師匠と呼ばれた影の奥、何体もの人影が存在していた。

「恐怖で現世を覆い尽くし、奴らに復讐を遂げるまで嘯を続ける。

それが、あたしたち“百物語組”の存在理由だからネ」

今、深き闇が胎動を始めた。

朝と嫉妬と深き闇（後書き）

お久しぶりです。

前回の更新から早1ヶ月近く……

本当にすみませんでした。

夏休みに入るまでこんな調子ですが、見捨てないでくれるととてもうれしいです。

噂と会話と放課後特訓

「そ、それは本当ですよ!?!」

「う、ウソついてないでしょうね!?!」

「ほ、本当なのか!?!」

月曜日の朝、俺はいつものようにシャルルと一緒に朝食をすませ教室の前に来たところ、廊下まで聞こえてくる声に驚いた。

「……なにが起こってるんだ?」

「さあ?」

シャルルに聞いてみたが、かわいらしく首をかしげるだけだった。

「本当だつてば!この噂、学園中で持ちきりなのよ?月末の学年別で優勝したら神裂くんと……」

「何の話だ?」

「「「「きゃあ!?!」「「「「」

後ろから声をかけると、お化けでも見たような悲鳴を上げられた。

……あながち、間違いじゃないんだが。

「な、なんであんたがいるのよ!?!」

「そ、そうですね。どうして鯉半さんが……!?!」

「そ、そうですね半!?!」

「あん、ここは俺のクラスで、そこが俺の席だからだが……」

こいつらが話をしていたのは俺の席の周り。

どいてくれねえかな……

「し、知ってる(わよ)(ますわ)!!」

そう言っつて席から素早く離れる三人。

最初に一緒に居た女子は早々に待避していた。

「で、何の話をしてたんだ?」

席に荷物を置きながら三人の方に問いかけた。

「え、何の話してたっけ?」

「そうですね。何の話だったかしら?」

「そうだ、気にする事ないぞ鯉半」

鈴、セシリア、一夏は目を逸らしながら話を逸らした。

「じゃ、じゃああたし自分のクラスに戻るから!」

「そ、そうですね！わたくしも自分の席につきませんと」

「そうだな！じゃあ、またあとでな鯉半」

そう言つて、そそくさと退散していく三人。

「……どうしたんだ、あいつら？」

「さあ……？」

「（なぜ、このようなことに）」

私、篠ノ之箒は窓側の自分の席で一人頭を抱えていた。

もちろん、態度には出さないで心の中でだ。

「（あ、あの約束は私と鯉半だけの話だろうっ！）」

最近、学年別トーナメントに関する噂が流れている事は知っている。

だが、その内容が問題だった。

『学年別トーナメントの優勝者は神裂鯉半と交際できる』

鯉半がそんなことを言いふらすわけがない。

なら、どこから情報が漏れたのだろうか……

「（と、とにかく優勝すれば大丈夫だ。優勝すれば……）」

鯉半が他の女と付き合うなんて絶対に嫌だ。

わ、私だって年頃の乙女だ。

その、鯉半とそう言う関係になりたいとも思っている。

昔は、一夏や千冬さん、それに姉さんだけだったがIS学園に来てからというもの、次々と強力な敵が出現し始めた。

「り、鯉半が悪いんだ。誰にでも優しくして、誰でも落として……」

「そうですね。まあ、それが鯉半さまのいいところであり、悪いところでもあるんですが……」

「ああ。全く人の気も知らないで……は？」

私は今、誰と話していた？

声のした方を見ると、窓辺に腰かけた氷麗がいた。

「氷麗、いつから居た……」

「えっと、鯉半さまが悪いんだって篝さんがつぶやいてた所からですが？」

き、聞かれてしまっていたのか!?

「まあ、私だけにしか聞こえていないと思いますよ。だって他の方々は噂の話で持ちきりですし……」

氷麗の言葉を聞いてホツとした。

だが、重要な部分を氷麗に聞かれた……

「あ、私は気にしてませんからダイジョウブですよ」

「いや!明らかに大丈夫そうじゃない目になってるぞ!」

氷麗の目がなんか渦を巻いたような目になってこつちを見る!

身の危険を感じたその時、タイミング良くチャイムが鳴った。

「あ、チャイムが鳴っちゃいましたね。私は自分の席に戻りますね」

「あ、ああ……」

そう言つて氷麗はフフと笑いながら自分の席に戻つて行った。

去り際に

「あんまり調子に乗らないくださいね。凍らせますよ?」

と言われたが私は何も聞いてない!

聞いてないっしたら聞いてない!!

「……おい」

「どっしたんじゃ?」

「いや、何だこの状況は」

「なんじゃ、主と少しでも一緒に居たい妾めかけの想いがわからんのか?」

現在、授業の合間の休憩時間なのだが、なぜか乙女に捕まって廊下を歩いている……腕を組んで。

「別にいいけどよ……ん?」

嬉しそうに腕に強く抱きついてくる乙女から視線を外した先に廊下の角で立っている一夏がいた。

「おい、いち」なぜこんなところで教師など!」「あん?」

一夏が立っている先からボーデヴィツヒの声が聞こえた。

「なんじゃ?」

「さあな……」

「夏とは違う位置から聞き耳を立てていると

「何度も言わせるな。私には私の役目がある。それだけだ」

さらに千冬の声が聞こえてきた。

「このような極東の地で何の役目があるというのですか!」

声を荒げて千冬に不満の思いの丈をぶつけるボーデヴィツヒ。

「お願いです、教官。我がドイツで再びご指導を。ここではあなたの能力は半分も生かされません」

「(なんの話じゃ?)」

「(さあな。その時期、俺は本家に居たからな)」

一緒に聞いていた乙女が聞いてきたが、生憎俺にもなんであんな話をしていいのか分からない。

おそらく、二人が知り合ったのは俺が本家に戻っている時の出来事なんだろう。

乙女と話している内に、千冬に言い包められたボーデヴィツヒは早速でその場から去って行った。

「(気に食わん奴じゃな)」

いや、お前も似たような性格だぞ。

などと考えながら、さっさとその場を去ろうとしたんだが

「その女子に不純異性交遊をしている二人。盗み聞きとは感心しないぞ」

バレていて逃げられなかった。

いつもだったら、明鏡止水で逃げられたのに……

「う、なんでバレてたんだ……？てか、不純異性交遊してる二人？」

一夏が廊下の角から出て千冬という言葉に首をかしげていた。

その中、俺と乙女も物陰から出た……腕を組んだまま。

「（ムカツ）」

「はあ、俺達はたまたまだからな」

「そうじゃぞ。たまたま二人で逢引している時にたまたま通り掛かっただけじゃ」

そう言いながら腕から離れ、体に腕をまわして抱きついてくる乙女。

おい、今こんなことすると……

「鯉半」

ほら、修羅が二人も出現したたる……

その後、乙女を守りながら二人の修羅の猛攻を休憩時間が終わるまで逃げ回った。

その後は二人の機嫌を直すのが大変だったけどな。

「鯉半、今日も放課後特訓付き合ってくれろ？」

「ああ、いいぞ」

「あつ、それ僕も行ってもいい？」

「うん。いいよ」

「夏にいつものように放課後の特訓に誘われシャルルも参加してきた。」

「で、今日使える所は……」

「第三アリーナだ」

「「わあ!?!」」

「夏とシャルルが突然の声に驚いた。」

ん、俺か？

俺は気配で気付いてたからな。

その声をかけてきた筈は不機嫌そうな顔をしていた。

「そんなに驚くほどの事か。失礼だぞ」

「「ごめんなさい」」

「いや、別に責めているわけではないが……」

二人のあまりにも早い謝罪に筈もたじろいってしまった。

その後、他愛もない話をしながら第三アリーナに向かっていると

「あ、鯉半さま」

前から氷麗がやって来た。

「これから特訓ですか？」

「ああ」

「一緒に行ってもいいですか？」

氷麗は俺ではなく一夏と筈を見ながら言った。

そして、三人の間には火花が散っている。

「別にかまわないぞ」

「ありがとうございます」

フフフと笑っているが、目が笑っていない。

「（ねえ、鯉半。三人が怖いんだけど……）」

「（俺もそう思っていた所だ）」

シャルルが俺の服の袖を掴みながら訴えてきた。

俺も同意見だ。

「……さあ、行こうか（きましよう）（鯉半）様」

「あ、ああ……」

火花を散らす三人に挟まれながら第三アリーナに向かっていくと嫌な予感がしてきた。

「（なんだ、胸騒ぎがする……）」

俺のこういつ時の勘はよく働く。

アリーナに着く直前、アリーナから爆発音が聞こえた。

「……………!?」「……………」

胸騒ぎが当たったみたいだ。

俺達は急いでアリーナの中に入って行った。

「鈴！セシリア！」

そこには、傷ついた鈴とセシリアの姿があった。

その先では自らのISである『シユヴァルツエア・レーゲン』を纏ったボーデヴィツヒの姿があった。

「あいつ何やってるんだよ……………」

遅れてきた一夏が声を震わせながら言った。

ボーデヴィツヒは動けない二人に対して止めを刺そうとしている。

「やめっ！」

一夏が叫ぼうとした時、俺の我慢も限界を超えた。

俺は、袷切丸だけを展開して駆け出し止めを刺そうとした腕を袷切丸で受け止め弾き飛ばした。

「鯉半……………?」

「鯉半さん……?」

「ふん……感情的で直情的、絵にかいたような……!?!?」

何かを言おうとしたボーデヴィツヒだったが、俺の気配に『畏れ』
た。

「軍人だか代表候補生だか知らねえが、俺の大切な奴らに手を出す
奴あ……許しちゃおけねえ!!」

「貴様あ!!」

一触即発だった空気が弾け、ボーデヴィツヒがこちらに駆け出そう
とした時、ひとつの影が割り入ってきた。

「やれやれ、これだからガキの相手は疲れる」

「千冬姉!」

予想外の人物の登場に、鈴たちの手当てをしていた一夏が叫んだ。

千冬の手には俺と同じようにISの補佐なしでのIS用近接ブレイ
ド。

お互い常人離れしているよな。

「模擬戦をやるのは構わん。……が、アリーナのバリアーまで破壊
する事態になられては教師として黙認しかねる。この戦いの決着は
学年別トーナメントで付けてもらおうか」

「教官が仰るなら」

そう言っつてボーデヴィツヒはISを解除した。

そして俺も、祢々切丸を消した。

「神裂もそれでいいな」

「……はい」

「では、学年別トーナメントまで私闘の一切を禁止する。解散！」

千冬の銃声のような手を叩く音がアリーナに響いた。

噂と会話と放課後特訓（後書き）

お久しぶりです。

全然更新できなくてすみません。

就職活動が忙しくてなかなか書けなくて……

今月中にもう一本あげたいな。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0495r/>

IS<インフィニット・ストラトス> 百鬼を背負いし者

2011年8月18日18時03分発行